

来日したザクセン関係者

松 尾 展 成

目 次

- (1) 初めに
- (2) 来日したザクセン関係者
- (3) 注引用文献目録
- (4) Namenverzeichnis von 50 "Sachsen" in Japan, 1649—1998

(1) 初めに

本稿の目的は、日本とザクセンの文化交流史⁽¹⁾を解明するための基礎的作業の一つとして、来日したザクセン関係者の氏名と経歴・業績を、簡潔に紹介することである。本稿において「ザクセン」は、1815年のヴィーン会議によって領土の縮小したザクセン王国、両大戦間期のザクセン邦、第二次大戦後のドイツ民主共和国時代のドレスデン、カルル・マルクス・シュタットとライプツィヒの3県、および、1990年のドイツ再統一以後のザクセン州を指し、1815年以後のプロイセン王国ザクセン州の領域（および、その後継行政区域）を含まない。また、1649年に出島蘭館に着任した医師シャムベルガーを最初とする、「来日したザクセン関係者」は、来日ドイツ人の中で、次の3条件の一つ以上に該当する人を指す。第1は、ザクセンで生まれた人、第2は、来日前にザクセンで職業活動を行なった人、第3は、離日後にザクセンで職業活動を行なった、あるいは、現に行なっている人である⁽²⁾。したがって、ザクセンの教育機関に在籍、あるいは、そこで学位あるいは教授資格を取得しただけのドイツ人は除外される。

来日したザクセン関係者は、日本側資料あるいは先行業績における表記法に従って、その姓の五十音順に配列される。場合によっては、生没年の後に私の表記法が（ ）内に示される。武内 1995に記載されている人物の経歴・業績・参考文献については、同書を参照されたい。また、来日ザクセン人の著作も、日本に関連するものに限定される。

本稿の意味におけるザクセン関係者を確定することは、私にとって容易でなかった。邦語文献では「ドイツ生まれ」、ないし、「ドイツ人」と一括される場合が、きわめて多いからである。また、本稿で取り上げたザクセン関係者の生地・生年、没地・没年、経歴・業績についても、多くの不明な事項が残っている。とくに、テンツラーについては名ばかりでなく、姓の原綴も確定できなかった。さらに、私の調査が不十分であるために、本稿に含まれていないザクセン関係者も、少なくないであろう。そのために私は先学・同学諸氏の教示を切望している。そして、コルシュルトに関する加茂詮、藤原隆男両教授の、また、シャムベルガーとマイスターに関するヴォルフガング・ミヒェル教授の、伝記研究の一層の進展を期待している。

本稿の作成に際して数多くの教示を与えられた、ミヒャエル・ラウック助教授、荻慎一郎教授、高橋輝和教授と日本の多くの個人・機関に、そしてまた、ザクセン州立中央文書館、ザクセン州立ライプツィヒ文書館付属ドイツ系譜学センター、ドレーズデン市立文書館、ケムニッツ市立文書館、フライベルク鉱業大学文書館、テュービンゲン大学図書館、バイエルン州立図書館など、ドイツの諸機関に、さらに、文献の検索と収集に配慮された岡山大学経済学部資料室に、心から感謝する。これらの教示によって、従来知られていたザクセン関係者数人について、生地、没年などが明確にされ、また、従来紹介されていなかった相当数のザクセン関係者の氏名が解明された。ちなみに、本稿で取り上げたザクセン関係者50人のうち、武内 1995所収は21人である。

(注1) ライプツィヒ大学は19世紀末から第二次大戦直後まで日本学講座を設置してお

り、1996年に再興した（1932年から45年までは日本学研究所で、所長は初代ユーバーシャール、次いでハミッチュであった）。ドレーズデン工業大学は、日本とザクセンおよびドレーズデン市との関係の改善に寄与した元佐賀県知事鍋島直紹（1981年没）を記念して、ドレーズデン大公園の傍らにあって、水道設備を研究している一建物を、1982年に鍋島館と命名した。83年には鍋島家旧蔵の江戸時代の工芸品（漆器など）が同大学に寄贈された（ドレーズデン工業大学文書館回答）。

ザクセンにある日本美術工芸品のコレクションで、最も著名なものは、ドレーズデン磁器博物館の近世肥前磁器である。これは現在では、18世紀前半のアウグスト強健侯当時と比較すると、その数を減じたとしても、世界有数の、そして、ヨーロッパ最大の、近世肥前磁器コレクションである。ショイベの民族学関係コレクションはライプツィヒ・グラッソ工藝博物館に収められている。ズスマンがグラッソ博物館に寄贈したものは、現在どのようになっているであろうか。私の質問に対して同博物館からは回答がない。ドレーズデン銅版画美術館は小沼隆一郎画伯の現代版画12点を所蔵している。

ザクセンに関係のあるドイツ人の蔵書で、日本に請来されたものは、私の知るかぎり、次のとおりである。生計費のエンゲル係数で知られる、ザクセン、後にプロイセン統計局長エンゲル（Ernst ENGEL）の蔵書は東大経済学部にあったが、関東大震災によって灰燼に帰した（高野 1961, pp. 7, 11, 112-113, 115, 130）。歴史派経済学の巨匠、ライプツィヒ大学教授ビューチャー（Karl BÜCHER）の蔵書は京大経済学部、ライプツィヒ大学の植物学教授で、留学生、後の東大教授三好学を指導したプフェッファー（Wilhelm PFEFFER）のそれは、岡山大学資源生物科学研究所（大原孫三郎創設の大原農業研究所の後身）に、ライプツィヒ大学法学部教授「ワッハ」（Adolf WACH）のそれは東大法学部にある。このヴァッハについては、シュミット 1995, pp. 46, 81, 147を参照されたい。

日本とザクセンとの関係を示す事例を、さらに挙げておく。第1は、1979年に佐賀県有田町とマイセン市が姉妹都市の関係を結んだことである。有田は日本における磁器生産の、マイセンはヨーロッパにおける硬質磁器生産の、発祥地である（ドレーズデンは製作実験成功の地）。第2は、ドレーズデン中心部からエルベ河をすこし遡った所に、ビルニッツ宮殿があるが、そこの庭園に聳える日本種椿（*camelia japonica*）の古木である。これは、オランダ東インド会社から長崎・出島に派遣されたスウェーデンの植物学者トゥンベルグ（Carl Peter Thunberg）が、1776年にヨーロッパに持ち帰った4本の中の1本である。他の3本（ロンドンのキュー植物園、ヴィーン、ハノーファー）は次々に枯れていったので、ビルニッツの椿はヨーロッパの樹木の中で貴重なものである。この椿は、当初は鉢に植えられ、冬には温室に移されていたが、1801年に現在地に定植され、冬にはガラス製の覆いで保護されるようになった。今では高さ9メートルに近い大木となり、毎年約2万5千の花を咲かせている（ザクセン州大蔵省城館管理部回答）。

（注2）以下の人物を来日ザクセン関係者とする見解があるが、誤りである。

(a)ベルヴィヒ（Christian BERWIG, 17??-1??）。1739-45年に長崎・出島蘭館の医師助手であった彼は、ザクセンのヴィーゼンフェルト（Wiesenfeld）出身とされている（Kraas 1992, S. 5）。しかし、この名前の集落はザクセンにはない。Vgl. Blaschke 1957, S. 59*。Wiesenfeldは、1803年までマイnitz大司教領（以後プロイセン）に属したテューリンゲンの

村である。Berwig という姓の家族は、現在ではこの村と周辺にいない。ハイリゲンシュタット市立文書館回答。

(b)ホエルベ (Anton Herman HÖRBE, 1881—1???) (ヘルベ)。陸軍雇独逸人、個人略歴 (中村 1973, p. 236) によれば、彼は「サクセン州ライヘンバッハ市」に生まれ、ボン大学を卒業し、1906—09年に陸軍砲工学校・語学教師となった、とされている。ボン大学文書館回答によれば、彼はオーストリア国籍、ボヘミアのデルフェル (Dörfel) 生まれで、ボヘミアのライヒェンベルク (Reichenberg) の高等学校を卒業している。

(c)ジェニン (Alexis JANIN, 18??—1897) (ジャンン)。招聘されて、1873—76年に佐渡金山の技術改良に尽力した米国人のジェニン (JANIN) は、フライブルク大学の助教授であった、との説がある (吉田 1968, pp. 136-137)。ただし、武内 1995, p. 174では、ジェニン (JENIN) はハイデルベルク大学助教授とされている。ジャンン (JANIN) が優秀な成績でフライベルク鉱業大学を1868年に卒業したのは、事実であるが、卒業直後に彼は米国に帰った。Schiffner 1935, S. 289。なお、植田 1990, p. 10を参照。

(d)レーデブール (Adolf LEDEBUR, 1837—1906) (レーデブーア)。フライベルク鉱業大学冶金学教授の彼は、多くの日本人留学生を指導したばかりでなく、官営八幡製鉄所の建設にも協力した。彼については、東大を訪問した、という説 (佐々木 1985, pp. 38-39) と、日本には来ていない、という説 (吾妻 1974, p. 152; 上村 1984, p. 75) がある。フライベルク鉱業大学文書館の回答によれば、彼は来日していない。

そのために、上記の4人は本稿では取り上げられない。ただし、本稿には、「ザクセン生まれ」とのみ記されていて、正確な生地が判明しないドイツ人2人 (エクスネル、ユンカー。さらにオーヴァーカンプ、フラッケを加えると4人)、および、ザクセンで活動したが、生地不明のドイツ人3人 (テンツラー、ハルティヒ、マルティン) も、含まれている。

なお、ドイツ人以外では、私の知るかぎり、次の2人がザクセンから日本に来ている。

(A)バクーニン (Mikhail Aleksandrovich BAKUNIN, 1814—1876)。ロシア人の彼は1848年からザクセンに住んで、三月革命末期、49年5月にはドレースデン蜂起を指導した。蜂起鎮圧後ケムニッツ市で逮捕され、ロシアに引き渡された。彼は流刑地シベリアから61年に脱出して、函館に着き、W. ハイネ (本稿参照) と同じ船で横浜からアメリカに渡った。ただし、彼はこの時に日本人と接触していない。木村 1979, pp. 22-24, 35-38。

(B)ブロムシュテット (Herbert BROMSTEDT, 1928—)。スウェーデン人で、1975—85年に国立ドレースデン交響楽団首席指揮者であった彼は、86年からNHK交響楽団名誉指揮者である。音楽辞典 1991, p. 1689; NHK交響楽団回答。

(2) 来日したザクセン関係者

(1) アルノルト (Wido ARNOLD, 1965—)

彼は文芸評論家の子としてドレースデンで生まれ、ドレースデン工業大学卒業後、1993年に岡山大学大学院修士課程 (土木工学専攻) に入学した。95

年から博士課程に在学している⁽¹⁾。

(注1) 本人回答。

(2) ヴェンチッヒ (Heinrich WÄNTIG, 1870—1943) (ヴェンツィヒ)

彼は、ザクセン宗教省局長を父として、西南ザクセンのツヴィッカウ (Zwickau) 市で生まれ、1893年にライプツィヒ大学で学位を取得した。グライフスヴァルト大学教授 (1899年) などを経て、1904年にハレ大学教授となった。09年東大法学部に招かれ、経済学と財政学を講義し、「東京帝国大学ニ於ケル経済学教授法改良意見」を各方面に提出した。この意見書は、東大法学部からの経済学部の分離・独立に相当の役割を果たした。14年にハレ大学教授に復帰し (27年まで)、21—28年にプロイセン邦議会議員 (社会民主党)、27—30年にプロイセン邦ザクセン州長官、30年に半年余りオットー・ブラウン内閣でプロイセン邦内務大臣となった。31年に社会民主党を離れ、西ドイツのバーデン・バーデンで没した⁽¹⁾。

(注1) 武内 1995, p. 46; 高野 1961, pp. 8—9, 122—130; 東大・経済 1976, pp. 15, 616, 620; Reichshandbuch 1931, S. 1967—1968; Kosch 1963, S. 1170.

(3) エクスネル (Ottomar EXNELL, 1849—1???) (エクスネル)

彼は鍛冶屋の子としてザクセン (詳細不明) で生まれた。京都府営「梅津パピール・ファブリーク」の技師に招かれて、1875年から77年まで (あるいは、73年から76年まで) 滞在し、洋式製紙技術の導入に尽力した。来日前の経歴と帰国後の消息は不明である⁽¹⁾。

(注1) 吉田 1968, pp. 195—197; 宮永 1993, p. 412; Meissner 1961, S. 48.

(4) オーヴァーカンプ (Christian Hendrik OVERKAMP, 17??—1???)

1781—84年に長崎・出島蘭館の上級医師であった彼は、ザクセンのダーレン (Dalen) 出身とされている⁽¹⁾。それ以外は不明である。しかし、ザクセンには Dalen という集落はない⁽²⁾。私は、ダーレンが北ザクセンの Dahlen 市である可能性を考慮して、同市立文書館に照会したが、回答がない。

(注1) Kraas 1992, S. 6.

(注2) Vgl. Blaschke 1957, S. 11*.

(5) ゲスナー (Gesine GÖSSNER, 1961—)

彼女は北ザクセンのリーザ (Riesa) 市で肉屋の子として生まれ、同市の高等学校を経て、ライプツィヒ大学で学び、1992年に現代オランダ女性文学に関する論文によってライプツィヒ大学哲学博士となった。91年から同大学で現代オランダ文学を講義した後、92年に来日した。それ以来、九州工業大学工学部でドイツ語を担当している⁽¹⁾。

(注1) 大学職員録 1996(1), p. 947; 本人回答。

(6) 高 ヘティ (旧姓ヴェーケル) (Hedy KOU, geb. WEKEL, 1908—)

(高 ヘディ)

彼女はライプツィヒで生まれ、同市の歌劇場のバレリーナとなった。ライプツィヒ音楽大学でチェロを学んでいた高勇吉と1927年に出会い、帰国する勇吉に伴われて、翌年来日し、東京で結婚した。彼女は間もなくバレエを教え始め、また、勇吉とともに日本各地で、さらに、アジア諸国でコンサートを開いた。第二次大戦が始まると、二人はスパイとして監視されたので、勇吉は満州国に移り、放送局で音楽の仕事に従事した。敗戦後、勇吉は家族とともに、音楽教育のために国民党政府によって北京に移された。49年に日本に帰国して間もなく、勇吉は没した。その後ヘディは非常に苦しい生活を送った。午前中はドイツ人のための幼稚園で教え、午後はジーマンス社のために働き、夜は日本人にドイツ語を、週末には知人宅の洋間でバレエを教えた⁽¹⁾。

(注1) Foreign wives 1996, pp. 8-9, 17-19.

(7) コルシェルト (Oscar KORSCHULT, 1853—1940)

彼は小学校教師の子として東部ザクセンのベルテルスドルフ (Berthelsdorf) 村で生まれた。1871—75年にドレースデン工業専門学校 (ドレースデン工業大学の前身) で、その後76年までベルリン大学哲学部などで化学を学んだ。短期間ドレースデンとライプツィヒのビール工場で化学技師を勤め

た後、来日した。彼は1876年から東京医学校、次いで東大医学部で化学を教授するとともに、日本酒の化学分析を行ない、北海道におけるビール醸造を指導し、防腐剤サルチル酸の効用を解説した。80年に内務省地理局地質課分析係長に転じ、精力的に調査・研究を行なった。彼は、数カ所の土壌の化学分析に基づいて、西欧農法の移入ではなく、在来農法の改良を提案した（「日本農業ノ目途」、『地質調査所年報』、明治15年第1号、1882年。農林省農務局（編）、『明治前期勸農事績輯録』、下巻、長崎出版 1975に復刻）。「日本海塩製造論」（『地質調査所報告』、明治16年第2号、1883年。『日本塩業大系 資料編 近・現代2』、日本専売公社 1975に復刻）は、後の塩業に大きな影響を与えた。「日本陶業」は、日本陶磁器とその原料に関して非常に多くの資料を分析している。この論文は後に『窯業協会誌』、38—41号（1930—33年）に、さらに、『窯技』、15—22号（1965—68年）に公表された。彼は1884年に日本を離れ、帰国した。85年に香港で事業を計画したが、成功しなかった。ライプツィヒで太陽エーテル光線器具の販売によって、あるいは、化学技師として長く生活し、そこで没した。滞日中に囲碁を習い覚え、『碁・チェスに對抗する日本と中国の遊技』*Das japanisch-chinesische Spiel Go. Ein Concurrent des Schach*, Yokohama 1881⁽¹⁾を著した⁽²⁾。藤原隆男教授の示唆に基づいて、ツィッタウ市立文書館とライプツィヒ市史博物館に質問状を出したところ、回答があった。それによれば、コルシェルトは東部ザクセンのツィッタウ（Zittau）市で1887年に工場の建設を計画し、1900年まで同市の刊行住所録に記載されていた。他方では彼は、1892年にライプツィヒの刊行住所録に初めて記載された。この時の職業は工場主（Fabrikant）であった。

（注1）GV (1), Bd. 79, S. 154. 英訳本は *The Theory and Practice of Go*, translated by Samuel P. King and George G. Leckie, Rutland/Tokyo 1966.

（注2）武内 1995, p. 153; 橋本 1970, pp. 539-543; 友田 1978, pp. 24-38; 平田 1983, pp. 24-27; 加茂 1993, pp. 240-247; 藤原 1994, pp. 2-6, 9-11; 藤原 1995, pp. 95-110; 太田 1996, pp. 41-51.

(8) サイモン (Edmund SIMON, 1882—1947) (ジーモン)

彼は商人の子としてドレーズデンで生まれた。ベルリン大学などで法学、日本語を学び、1908年にドイツ帝国外務省から日本に派遣され、神戸、次いで長崎駐在のドイツ領事となった。11年から14年まで長崎高商講師としてドイツ語を教えた。『外国人への日本の土地の無期限譲渡に関する1904年5月22日付けハーグ常設裁判所の判決の本質と国際法的意義』*Natur und völkerrechtliche Tragweite des Urteils des Haager Permanenten Schiedsgerichtshofes vom 22. 05. 1904 betreffend die zeitlich unbegrenzte Überlassung von Grundstücken in Japan an Fremde*, Diss. Jur. Greifswald 1908によって法学博士、『琉球諸島に関する研究』*Beiträge zu Kenntnis der Riekiu-Inseln*, Diss. Phil. Leipzig 1913 (= *Beiträge zur Kultur- und Universalgeschichte*, Bd. 28) によって哲学博士となった。琉球については後年、別の著書、『琉球。古代日本の鏡』*Riukiu. Ein Spiegel für Altjapan*, Berlin 1923も発表した。14年末からミュンヘン・南バイエルン商工会議所に勤務し、22年から没するまで、その法律顧問ないし専務理事であった⁽¹⁾。

(注1) 武内 1995, p. 162; 長崎大 1975, p. 340; GV (1), Bd. 135, S. 56; GV (2), Bd. 122, S. 347; ミュンヘン・南バイエルン商工会議所 (Industrie- und Handelskammer für München und Oberbayern) 回答。

(9) シャムベルゲル (Caspar SCHAMBERGER, 1623—1706) (シャムベルガー)

彼は商人の子としてライプツィヒで生まれ、1637年から同市で理髪外科を学び、40年に修業の旅に出た。43年にはオランダ東インド会社の理髪外科医となり、アジア各地で同会社船の船医として勤務した。オランダ東インド会社の日本商館には1630年から医療関係者が駐在していたが、シャムベルガーは4人目のドイツ人として、49—51年に長崎商館に滞在し、商館長の江戸参府に二度同行した。第1回目には彼は日本側の要請で江戸に長期滞在して、患者を治療し、日本人医師を指導した。これによって彼は、彼の名カスパル

に因むカスパル流外科（ポルトガル系南蛮医学に続くオランダ系紅毛医学の最初の流派）の祖となった。私の知るかぎり、彼が、来日した最初のザクセン関係者である。彼は相当の財産を蓄えて、55年に帰郷し、ライプツィヒで羊毛商人となり、58年にその市民権を取得した。彼は、当時としては稀な長寿に恵まれ、莫大な遺産を残して、同市で没した⁽¹⁾。

(注1) Michel 1990(1), S. 41-51; ミヒェル 1990(2), pp. 1-6; ミヒェル 1991, pp. 143-151; Michel 1993, S. 137-154, 171-180; Michel 1994, S. 149-186; Michel 1995(1), S. 111, 116-119; ミヒェル 1995(2), pp. 3-26; ミヒェル 1995(3), pp. 85-92; ミヒェル 1996(1), pp. 41-48. なお、宗田 1989, pp. 123-127を参照。

(10) シャールシュミット (Clemens SCHARSCHMIDT, 1880—1945)

彼は西南ザクセンのライヒェンバッハ (Reichenbach) 市に紡績工場主の子として生まれたが、1899年から自活しつつ、ライプツィヒ大学で学んだ。1902年から11年まで彼は、六高 (岡山) の外国人教師としてドイツ語を担当しながら、日本語を学習し、日本の工芸品を収集した。帰国後ライプツィヒ大学でさらに日本史を研究した。出雲守明衡の『明衡往来』の翻訳と注解、『藤原明衡の雲州消息。日本最古の書簡文範』*Unshu-Shosoku von Fujiwara Akihira. Der älteste japanische Briefsteller*, Diss. Leipzig 1917によって哲学博士となった。第一次大戦で負傷し、16年からベルリーンの東洋語研究所に勤務して、夏目漱石、『三四郎』、第1章を翻訳し、「東京朝日新聞のドイツ論」などを発表した。戦後は同研究所の日本語担当教師代理、21年教師、24年教授、34年にベルリン大学名誉教授となった。日独防共協定の成立とともに日本史の科学的研究と教育は不可能となったけれども、彼は「芥川龍之介と西洋文学に対する彼の関係。現代日本精神史の一研究」(35年)などを発表した。40年にベルリン大学外国学研究所の設立に伴って、彼は日本学教授に任命された。しかし、彼はナチスに入党せず、ナチスと天皇制の思想に影響されない著作を発表した。彼はナチスの監視を受けたが、ヒトラーの日本語通訳を勤める時もあった。44年に彼はついに研究所から罷免され、週3回の豚小屋の清掃を命令された。その後、彼は「天皇制の歴

史・歴史偽造の解明」に関する著作を完成させたが、ドイツ敗戦の2週間前にベルリンの自宅で殺害され、あの原稿は兵士たちによって持ち去られ、失われた。その他の著書として、『日本』*Japan*, Berlin 1942; 『日本語における重要漢字』*Die wichtigsten chinesischen Zeichen im Japanischen*, Berlin 1938, 3. Aufl., 1943などがある⁽¹⁾。

(注1) 六高 1980, p. 26; Goch 1980, S. 312-317; GV (2), Bd. 113, S. 39.

(11) シャンツ (Moritz SCHANZ, 1853—1922)

彼は、商人の子として西南ザクセンのトロイエン (Treuen) 市で生まれた。父とともにケムニッツ市に移った彼は、1874年まではケムニッツの一商会の従業員であり、75年に南米ブラジルに赴いて、リオデジャネイロでドイツ系の商会の支配人となった。88年からさまざまな国を旅行し、多くの旅行記を書いた。そのために彼は研究旅行家・植民政策論者と見なされている。96—97年にドイツ帝国・プロイセン王国などの政府、および、いくつかの商工会議所がアジアに派遣した通商使節団のザクセン繊維工業代表となって、来日した。それに基づく著書として、『東方への旅』*Ein Zug nach Osten. Reisebilder aus Indien, Birma, Ceylon, Straits Settlements, Java, Siam, Korea, Ostsibirien, Japan, Alaska und Canada*, Hamburg 1897がある。1900年にケムニッツに帰って、引退生活を送り、同市で没した⁽¹⁾。

(注1) Rauck 1988, S. 245-246; DBJ 1930, S. 446; ケムニッツ市立図書館回答。

(12) シュテヒャー (Georg Walter STECHER, 1874—19??)

彼はドレーズデンで生まれた。ドイツ皇帝は、日本陸軍少佐「クニ親王⁽¹⁾」のプロイセン陸軍部隊への配属を認め、その交換条件として、日本陸軍部隊へのドイツ陸軍士官の配属を求めた。1907年4月にザクセン陸軍省は、中尉 (第4野戦砲兵連隊) のシュテヒャーを大尉に昇進させ、プロイセンの4人の士官とともに彼とバイアー (下記参照) を2年間、日本に派遣することを、決定した。シュテヒャーは9月初旬に東京に到着し、07年11月に静岡の、08年9月には東京・世田谷の部隊に配属された。彼の配属期間は09

年8月末で切れるが、その部隊が09年9月から11月まで実施する予定の演習に参加するために、彼は3月間の配属期間延長を要望し、それを認めたザクセン陸軍省は08年11月に、日本政府との交渉をドイツ帝国外務省に対して要請した。彼は1909年の『ザクセン国政便覧』において、ドレースデン駐屯第4野戦砲兵連隊所属、日本派遣中、1913年にはピルナ (Pirna) 市駐屯第5野戦砲兵連隊の大尉と記載されている。1913年以後の消息は不明である⁽²⁾。

(注1) これは、1873年生まれ、1904年少佐、07—09年ドイツ派遣、29年没、元帥となった久邇宮邦彦王を指す。Rauck 1994, p. 210; 日本人名 1979, p. 432; 日本軍 1971, p. 27; 華族 1996, p. 37.

(注2) SAD, Nr. 4733; SHB 1909, S. 465; SHB 1913, S. 468; ザクセン州立中央文書館回答.

(13) シュピース (Gustav SPIESS, 1833—1900)

ライン地方デュースブルク市で高等学校上級教師の子として生まれて、卸売商人となった彼は、プロイセンのオイレンブルク使節団⁽¹⁾にザクセン商業会議所全権代表として同行した。この体験に基づいて、『1859—62年のプロイセンの東アジア遠征』*Die preußische Expedition nach Ostasien während der Jahre 1859—62. Reise-Skizzen aus Japan, China, Siam und der indischen Inselnwelt*, Berlin/Leipzig 1864 (日本関係部分の翻訳は小沢敏夫・訳、『シュピースのプロシア—日本遠征記』, 奥川書房 1934) を書いた。彼のライプツィヒ居住が初めて刊行住所録に記載されたのは、1863年であり、最後は82年であった。1882年にハンブルクに移り、そこで没した⁽²⁾。

(注1) ハイネの項を参照。この使節にはザクセン国王も全権を与えていた。シュピース 1934, p. 340.

(注2) 中井 1969, pp. 371—372; 今宮 1971, pp. 58, 84 (シュピースはオランダ語に習熟していたので、日本では通訳として予定されていた。しかし、ハイネの項で記すように、通訳の任務を果たしたのは、ヒュースケンであった); 宮永 1993, p. 67; Geschlechterbuch 1926, S. 361—362; ハンブルク州立文書館回答; ライプツィヒ市史博物館回答.

(14) シュプラングー (Eduard SPRANGER, 1882—1963)

彼はベルリン市郊外で商人の子として生まれ、ベルリン大学で1905年

に学位を取得した。1911年からライプツィヒ大学に勤務し（12年から教育学教授）、20年にベルリン大学に転じた。36年に来日し、各地で学術講演を行なった。それらは日本語に翻訳されて、出版された。彼は、1944年7月20日のヒトラー暗殺計画に関連して、逮捕された。第二次大戦後ソヴィエトの介入を避けて、彼はチュービンゲン大学に移り、同市で没した⁽¹⁾。

(注1) 武内 1995, pp. 194-195; 長井 1957, pp. 3, 18-19.

(15) シュミーデル (Otto SCHMIEDEL, 1858—1926)

彼はザクセン王立炭鉱所長の子として、ドレースデン近郊ツァウッケローデ (Zauckerode) 村に生まれ、ライプツィヒ大学などで神学を学んだ。1887年にドイツ福音教会の宣教師として来日し、独逸学協会学校（独協学園の前身）と新教神学校（東京）で教え、また、邦訳された著書によって日本キリスト教界に影響を与えた。92年に帰国し、ヴァイマル近郊ゲッテルで牧師となった。著書として、『日本のドイツ人』*Die Deutschen in Japan*, Leipzig 1920がある⁽¹⁾。ただし、私は、ヴァイマル近郊にゲッテルはなく、ゲッテルン (Göttern) 村だけがあることまでは突き止めたが、そこを管轄する教会官庁からは、シュミーデルに関する回答が得られなかった。

(注1) 武内 1995, p. 195; キリスト教 1988, pp. 664-665; GV (2), Bd. 115, S. 412.

(16) シューリヒ (Arndt Hermann SCHURIG, 1860—1???) (シューリヒ)

彼は「ザクセン・ワスワイン府」在籍の染色技師で、1888年から92年まで、陸軍省の管轄に移った千住製絨所の招聘技術者であった⁽¹⁾。しかし、「ワスワイン」という都市は、ザクセンに存在しない⁽²⁾。中部ザクセンのロスヴァイン (Roßwein) 市と考えて、同市に照会したところ、同市ルター派教会の1860年6月10日の洗礼記録に、上記綴りの人物が同市の染色工の子として記載されているが、それ以外は不明である、との回答があった。

(注1) 千住 1928, p. 36; 中村 1973, p. 219.

(注2) Vgl. Blaschke 1957, S. 58*.

(17) ショイベ (Botho SCHEUBE, 1853—1923)

彼はプロイセン王国ザクセン州ツァイツ (Zeitz) 市で工場主の子として生まれ、ライプツィヒ大学医学部を卒業して、1876年に学位を取得し、同大学内科ヴンダーリヒ教授 (Karl Wunderlich, 1815—77) の最後の助手 (ベルツの弟子に当たり、ベルツからも指導を受けた) を勤めた後、77年に京都府療病院 (京都府立医大の前身) 医学教師に招かれた。4年間在職し、寄生虫病の研究など京都地方の医学の発展に貢献した。脚気について彼は、ベルツと同じように伝染病説を主張した。81年に療病院は洋風建築を新築したが、この建物はライプツィヒ大学 (病院の意味であろうか) を模したものであった。日本内外の西洋食推賞論に対して、彼は論文、「日本食」“Die Nahrung der Japaner”, in: *Archiv für Hygiene*, Bd. 1, 1883において、米食を擁護した。81年に彼は日本を離れ、「日本脚気論」で教授資格を取得した83年から、85年までライプツィヒ大学医学部講師として教えた後、故郷に近いグライツ (Greiz) の市医兼郡医となり、同市で没した。彼の民族学関係コレクションは1909年にライプツィヒ民族学博物館 (ライプツィヒ・グラッソ工芸博物館の前身) に収められた。著書に、『アイヌ』*Die Ainos*, Yokohama 1882; 『脚気』*Die Beri-Beri-Krankheit*, Jena 1894, 論文として、「脚気の歴史」“Beiträge zur Geschichte der Kak-ke”, in: *OAGM*, H. 24, 1881; 「日本食論」“Bemerkungen über die Nahrung der Japaner”, in: *OAGM*, H. 27, 1882; 「日本人の腸の長さ」“Die Länge des Darmes bei Japanern”, in: *OAGM*, H. 27, 1882; 「日本の脚気」“Die japanische Kak-ke (Beri-Beri)”, in: *Deutsches Archiv für klinische Medizin*, Bd. 31-32, 1882-83; 「日本人の疾病の臨床的考察」“Klinische Beobachtungen über die Krankheiten Japans”, in: *Archiv für pathologische Anatomie und Physiologie und für klinische Medizin*, Bd. 99, 1891; 「脚気」“Kakke. Collections of some foreign opinions on pathological matters peculiar to Japan”, in: *Sei-i-kwai medical journal*, Vol. 14, 1895などがあり、『脚気病論』、江坂秀三郎・ほか

訳、京都、若林茂助 1884；『脚気論』、賀屋隆吉・訳、東京、南江堂 1897などが邦訳された⁽¹⁾。

(注1) 武内 1995, p. 197；横田 1956(1), pp. 27-30；横田 1956(2), pp. 200-204；横田 1957(3), pp. 130-134；京都医史 1980, pp. 857-860, 916, 1016-1017；武智 1997, pp. 5, 46-47；Vianden 1985, S. 180-185.

(18) ショルツ (Paul SCHOLZ, 1889—1944)

彼はライプツィヒで音楽家の子として生まれ、ハンブルク、次いで、ベルリートの音楽大学でピアノを学び、1911年にコンクールでメンデルスゾーン賞を獲得した後、12年に卒業した。13年に東京音楽学校教師として来日して、ピアノを教授し、22年まで在職した。その後も没するまで東京にあって、個人教授や演奏活動を続け、日本の音楽界に大きく貢献した⁽¹⁾。

(注1) 武内 1995, p. 200；高野 1974, pp. 109-110；音楽辞典 1991, p. 909.

(19) スツスマン (August SUSSMANN, 1843—1921) (ズスマン)

彼は靴工の子としてライプツィヒで生まれ、1859年に同市の商業学校を卒業し、73年に妻の父 (Moritz Weinold) からヴァイノルト商会 (皮革取引業) を引き継ぎ、事業をさらに拡大して、同市屈指の富豪となった。95年、1903年、そして、08年の計3回、来日し、日本の風土と風俗に心を動かされた。彼は帰国後、日本で購入した美術・工芸品をライプツィヒのグラッシ博物館 (Grassmuseum. ライプツィヒ・グラッシ工芸博物館の前身) に寄贈した。また、演説あるいは新聞への寄稿によって、日本および日本文化を紹介した。日露戦争に際して彼は傷病日本兵のために同市で募金を行い、3,000マルクを日本赤十字社に寄付した。05年以後は毎年5月27日に、在留日本人と同市の名士を招いて、日本海海戦戦勝記念祭を行なった。08年の来日の際に、日本赤十字社に1,000円を寄付し、同社から有功賞を贈られた。——彼は1880年前後から、あらゆる日本人を私宅に招いて供応し、あるいは、集会に伴って名士に紹介した。そのために、彼の厚意を受けた日本人は、1908年頃までに数百人に達した。08年に彼は日本政府から勲五等を贈られた。なお、

彼は同じ08年にザクセン国王から商業参事官の称号を授与された。彼はライプツィヒで没した⁽¹⁾。——1909年から2年間ライプツィヒ大学に留学した新見吉治（後に広島文理大歴史学教授）の回想によれば、親日家の老富豪ズスマンは、日本人の「父（チチ）さん」と自称し、日本人を、誰でも「我が子」と呼んで歓待した。新見も、到着するとすぐに昼食に招かれ、さらに、3日間のシュレージエン旅行に招待された。新見はその後もズスマンにしばしば手厚くもてなされた⁽²⁾。

（注1）外交資料 120号；梅溪 1991, p. 606；ライプツィヒ市戸籍部回答（生没年はこれに従う）；ザクセン州立ライプツィヒ文書館付属ドイツ系譜学センター回答。

（注2）新見 1969, p. 200.

⑳ ゾンダーマン (Peter SONDERMANN, 1920—)

彼はドレースデンで生まれ、1936年から39年まで同市の邦立交響楽団（シュターツカペレ）付属音楽学校で学んだ。38年から同校在籍のまま同交響楽団の打楽器奏者となり、大戦従軍の後、45年から85年まで同交響楽団の首席打楽器奏者となった。同時にドレースデン音楽大学で打楽器を教授した。88—93年に NHK 交響楽団の客演団員となり、96年にも来日した⁽¹⁾。

（注1）NHK 交響楽団回答。

㉑ テンツレル (TENZLER (?), 名は不明, 18??—1???) (テンツラー)

生地不明の彼は、ケムニッツ市の「セキジセ・マシーネン・ファブリキ」あるいは「ゼクジツシエ・マシーネン・ファブリック」の技師で、内務省・千住製絨所の創業、紡毛機と織機の据え付けのために日本に派遣され、1878—79年に雇用された⁽¹⁾。ケムニッツ市立文書館の回答によれば、彼の姓と名を刊行住所録で確定することも、その後の彼の消息を同市で辿ることもできない。マルティンの項を参照。

（注1）千住 1928, pp. 4-5, 36；岡本 1983, pp. 59, 63, 76.

㉒ ナウマン (Edmund NAUMANN, 1854—1927)

彼は中部ザクセンのマイセン市で、同市建設技師長の子として生まれた。

ドレーズデン工業専門学校を経て、1874年に古生物学の論文によってミュンヘン大学哲学博士となった。75年に日本に招聘され、文部省金石取調所勤務、76年から開成学校（東京）、さらに東大理学部地質学教師となった。79年から内務省地理局地質課（82年から農商務省地質調査所）技師長に転じて、日本列島の地質調査に従事した。まず、調査担当者に調査の指針を与えるために、彼は「東奔西走」して、大まかな日本地質図を作成し、その解説として「日本列島構造・起源論」を書いた。彼は85年に帰国して、87年にミュンヘン大学講師となり、98年に退職し、いくつかの鉱山会社に関係した。彼の指導の下で作成が開始された日本地質地図は、100万分の一のものがようやく98年に完成し、1900年のパリ万国博覧会に出品された。それより前、86年から87年にかけて彼は日本人論について、ドイツ留学中の森鷗外と論争した。彼の日本列島構造論に関しては東大教授原田豊吉（画家原田直次郎の兄）が87—90年に批判し、ナウマンは90—93年に厳しく反論した。彼はフランクフルト・アム・マインで没した。日本の地質に関するナウマンの業績は、ナウマン（山下昇・編訳）、『日本地質の探究』、東海大学出版会 1996にまとめられている⁽¹⁾。ナウマン関係資料の多くは現在、糸魚川のフォッサマグナミュージアムに展示されている⁽²⁾。なお、1943年（！）にも日本鉱業会名誉会員とされている E. Naumann は、彼であろう⁽³⁾。

(注1) 武内 1995, p. 278; 山下 1991(1), pp. 57-59; 山下 1992(2), pp. 48-56; 山下 1992(3), pp. 51-54, 63; 山下 1992(4), pp. 37-49; 池守 1993, pp. 48-52; 山下 1993(1), pp. 209-226; 山下 1993(2), pp. 48-49; 山下 1993(3), pp. 937-939, 942-948; 山下 1995, pp. 245-267; 小堀 1969, pp. 185-293; 五十嵐 1986, pp. 147-159; 山崎 1989, pp. 151-174.

(注2) 竹之内 1995, pp. 67-69.

(注3) 鉱業会 1943, p. 10.

②3 ナホッド (Oskar NACHOD, 1858—1933) (ナーホト)

彼は商人の子としてライプツィヒで生まれ、1876年に商業学校を卒業し、2年あまり欧米各地を旅行した後、家業に従事した。94年にベルリン大学に入学して、ハーグでオランダ東インド会社の文書を研究し、ロシュトック

大学哲学博士となった。1926年に来日し、金銀島探険について講演した。著書として、『17世紀のオランダ東インド会社と日本の関係』*Die Beziehungen der Niederländischen Ostindischen Kompagnie zu Japan im 17. Jahrhundert*, Phil. Diss. Rostock 1897 (富永牧太・訳、『十七世紀日蘭交渉史』, 養徳社 1956=『天理図書館参考資料 5』)；『未発見の黄金国』*Ein unentdecktes Goldland. Ein Beitrag zur Geschichte der Entdeckungen im nördlichen Großen Ocean*, Tokyo 1900；『日本史』*Geschichte von Japan*, Bd. 1, Gotha 1906 (Urzeit bis 645 n. Chr.)⁽¹⁾；Bd. 2, Leipzig 1930 (Die Übernahme d. chines. Kultur 645 bis ca. 850)；『日本帝国関係欧文文献目録』*Bibliographie von Japan. 1906—1926. Enth. e. ausführl. Verzeich. der Bücher u. Aufsätze über Japan, die seit d. Ausg. d. 2. Bdes. v. Wenckstern "Bibliography of the Japanese Empire" bis 1926 in europ. Sprachen erschien sind*, Bd. 1 - 2 , Leipzig 1928；Bd. 3, Leipzig 1931 (1927-1929)；Bd. 4, Leipzig 1935 (1930-1932. Aus d. Nachlaß hrsg. von Hans Präsent)がある。彼は1930年頃にドレーズデンに移った。38年のドレーズデン刊行住所録に未亡人が記載されているから、彼の没地はドレーズデンであろう⁽²⁾。また、ライプツィヒ留学中の石橋智信（後に東大文学部宗教史教授）を一時、助手としていた「ナホッド」氏⁽³⁾は、彼であろう。

(注1) ベルツは1907年にこの書物の書評を書き、これが内容的に優れているにもかかわらず、文章が難解すぎるために、広く一般に読まれないことを、悲しんでいる。ショットレンダー 1971, p. 162.

(注2) 武内 1995, p. 279；Nachod 1897, *Lebenslauf*；GV (1), Bd. 101, S. 291；GV (2), Bd. 93, S. 154；Meissner 1961, S. 66；ザクセン州立ライプツィヒ文書館付属ドイツ系譜学センター回答；ドレーズデン市立文書館回答。

(注3) 新見 1969, pp. 202-203.

④ ネットー (Curt NETTO, 1847—1909)

彼はフライベルク市で、同地の鉱山監督の子として生まれ、フライベルク鉱業大学を1869年に卒業した。普仏戦争に従軍し、南ザクセンのシュネーベルク市の染料会社で化学技師として勤務した後、73年に秋田県小坂鉱山の技

師に招かれ、77年に東大理学部採鉱冶金学教師に転じた。85年に帰国するまで、多くの優れた学生を育成するとともに、日本鉱山業の振興策を提示し、さらに、日本の採鉱・冶金学界と母校フライベルク鉱業大学との関係を密にした。——帰国の途次、彼は、日本滞在中に預金していた中国の銀行の破産を知った。彼はパリで東京時代の友人バイア、ペアあるいはバイル (Martin Michael Bair, 1841—1904. 1870年から85年まで大体において東京滞在。一時は東京駐在名誉領事。バイア商会 [Firma Bair & Co.] 社主) とその義兄弟ビング (Samuel Bing, 1838—1905) に会った。80—81年に日本に滞在し、ベルツなどとも会食したビングは、ネットーに勧められて、日本の美術とくに浮世絵に関心を抱くようになっていた。優れた水彩画家でもあったネットーは、彼が収集していた多数の浮世絵を、銀行破産のためにパリでビングに売却した (ネットーの遺品の中に浮世絵はまったくなかった)。70年代の初めから東洋の物産を輸入し、パリで販売していたビングは、86年から (一説ではすでに75年から) 日本の美術品を取り引きするようになった。彼の店には、ゴンクール兄弟など多くのジャポニザンが集まった。とくに画家ゴッホはここで浮世絵を研究し、ビングから借りた浮世絵でもって、パリで最初の浮世絵展を一カフェで開いた。ヨーロッパ美術に対するアジアの影響の最初のもの、「中国趣味 (シノアズリー)」にヴァーグナー (後述) がいくらか関与していたとすれば、第2回目のそれ、「ジャポニスム」にはネットーがなにがしか関連しているわけである。——ところで、上記バイアは日本軍へのクルップ社の武器の販売を仲介しており、ネットーをクルップに紹介した。こうしてネットーは87年からクルップ社で、彼自身の特許に基づいてアルミニウムの精錬を開始した。しかし、ネットーは、彼の精錬方式よりも優れた電解方式が開発されると、クルップ社を去った。90年頃に彼は、フライベルクの恩師ヴィンクラー (Clemens Winkler, 1838—1904) 教授の推薦で、鉱物商人の設立した、フランクフルトの「メタルゲゼルシャフト」Metallgesellschaft の技術部門の責任者となり、97年には、この部門を分離して設立され

た会社の社長に就任した。米国からロシアまで各地を視察旅行してきた彼は、1902年に技術者としての活動を停止し、上記「メタルゲゼルシャフト」の監査役に就任した。彼は1889年からフランクフルト・アム・マイン市に住み、同市で没した。ただし、同市の刊行住所録には、彼は1904年からネットー＝ノートヴァング Netto-Nothwang の姓で記載されている（Nothwang は夫人の旧姓）。——彼の専門的著作に、今井巖・ほか訳、『日本鉱山編』、東大・刊 1880（復刻、三枝博音（編）、『日本科学古典全集』、第9巻、朝日新聞社 1942）；「鉱業試験所設立ノ必要」、『日本鉱業会誌』、33-34号、1889などがある。日本の風俗習慣に関しては、『日本の紙の蝶々〔折り紙〕』 *Papier-Schmetterlinge aus Japan*, Leipzig 1888⁽¹⁾（水彩画を含む）（東野紅一による部分訳と絵57点は鹿島卯女（編）、『明治の夜明け——クルト・ネットーのスケッチより』、鹿島出版会 1974, pp. 1-88にある）、ワグネル〔ヴァーゲナー Gottfried Wagener〕との共著として、*Japanischer Humor*, Leipzig 1901（高山洋吉・訳、『日本のユーモア』、刀江書院 1971）がある⁽²⁾。——なお、上記バイアは、1879年に小銃実包製造機械などを受注・納入し、80-81年には東京砲兵工廠の「金属薬筒機械建設・運転活用」のために雇用された「器具機械類の輸入商」、「ペール社主」「ペール」（陸軍雇独逸人、個人略歴）である⁽³⁾。

（注1）これは古い日本関係文献の中で最も優れている。Meissner 1961, S. 47-48.

（注2）武内 1995, p. 283；鎌田 1943, pp. 42-59；吾妻 1974, pp. 134-136, 144-146, 149-155；大島 1980, pp. 209-211, 225, 229-242, 273；瀬木 1981, pp. 510-511；池上 1981, pp. 515-516；宮島 1984, pp. 3-14；植田 1987, pp. 221-222；植田 1990, pp. 11-12；Schiffner 1938, S. 84-87；Curt Netto 1981, S. 6-11；Rauck 1988, S. 386-387；フランクフルト・アム・マイン大学図書館回答；フランクフルト・アム・マイン市史研究所回答。

（注3）Rauck 1988, S. 387。なお、中村 1973, pp. 146-147, 235ではペールとされている。彼はそのほかに、80年に大阪砲兵工廠製砲所の建設を依頼されたが、知人を紹介した。

(25) バイアー (Johannes Albert BEYER, 1874-19??)

彼はベルギーのアントウェルペンで生まれた。1908年8月にザクセン陸軍

省は、上記シュテヒャーと同じように、彼（第8歩兵連隊中尉）の大尉（第7歩兵連隊）昇進と、2年間の日本派遣を決定した。彼は同年12月初めには東京に到着し、最初の1年間はドイツ公使館付きとなり、2年目には日本の部隊（所在地不明）に配属されるべきである。彼は1909年の『ザクセン国政便覧』において、上記第7歩兵連隊（ライプツィヒ）所属、日本勤務とされている。なお、第8歩兵連隊の駐屯地もライプツィヒであった。彼は1914年には第7歩兵連隊の大尉であった。1914年以後の消息は不明である⁽¹⁾。

（注1）SAD, Nr. 4733; SHB 1909, S. 454-455; SHB 1914, S. 416; ザクセン州立中央文書館回答。

(20) ハイゼンベルク (Werner HEISENBERG, 1901—1976)

ビザンティン学者、後のミュンヘン大学教授の子としてヴェルツブルク市に生まれた彼は、ミュンヘン大学を卒業し、1924—25年にコペンハーゲンのニールス・ボーア教授の下で研究した後、量子論を発展させ、不確定性原理を確立するとともに、27年から41年までライプツィヒ大学物理学教授として、多くの研究者を養成した（32年度ノーベル物理学賞受賞）。彼は社会的にはナチスに批判的であったが、ドイツのウラン計画に参画した。42年からベルリートの物理学研究所の、55年からミュンヘンの天体物理学研究所の所長であり、ミュンヘンで没した。23—28年に同じボーアの下で学んだ、理化学研究所の仁科芳雄（岡山 1890—1951）に招かれて、29年に来日し、講演した（69年にも再来日）。理研の関係者など多くの日本人研究者が、ライプツィヒの彼の研究室に留学した⁽¹⁾。

（注1）朝永 1982, pp. 275-276; Kleint 1993, S. 137-138; DBE 1995, S. 550-551.

(21) ハイネ (Wilhelm HEINE, 1827—1885)

彼はドレスデンで生まれた。父は宮廷劇場所属俳優であり、当時ドレスデンの宮廷楽長であった作曲家リヒャルト・ヴァーグナーの幼友達であった。子のハイネは同市の美術学校で学び、1845年から3年間パリに留学した。パリ二月革命から強烈な印象を受けて帰郷し、ドレスデン宮廷劇場の

舞台装置画家となった。ヴァーグナーや上記バクサーニンと同じように、三月革命末期の49年ドレースデン五月蜂起に参加したが、蜂起が鎮圧されたために、ハイネはパリに亡命し、さらに同年秋、米国に渡った。米国国籍を取得して、52年に米国海軍にはいり、ペリー提督の日本派遣艦隊に、提督付き下士官として参加した(1853—55年)。彼が描いた絵のいくらかは、ペリーの公式報告書に収められた。59年に彼はベルリンに赴き、オイレンブルク(Friedrich zu Eulenburg)伯爵を全権公使とする、プロイセンの東洋派遣使節団(59—62年)のスケッチ画家となった。アメリカ公使ハリスは通訳官ヒュースケンを派遣して、オランダ語によるプロイセン使節団の対幕府交渉を援助した。ハイネは、オランダ語に堪能であったが、使節団によって無視された。また、日普修好通商条約締結の交渉が60年9月から半年にも及んだので、この間ハイネは陸上で多くのスケッチを描いた。しかし、彼の描いたスケッチと撮影した写真は、同使節団の公式報告書におそらく収録されておらず、彼は画家としても無視された。61年1月にヒュースケンが攘夷派の薩摩浪士に襲撃されて、アメリカ公使館に担ぎ込まれた時、最初に駆け付けたドイツ人がハイネであった。条約締結後の5月にハイネは、中国でプロイセン使節団と別れて、長崎・横浜経由でアメリカに向かった。南北戦争が勃発していたので、三月革命挫折後アメリカに亡命していたドイツ人の多くと同じように、ハイネは北軍に投じ、最後には准将にまで昇進した。戦後はパリ、次いでリヴァプールの領事に任ぜられた。71年のドイツ帝国成立後、彼は故郷に帰り、ドレースデン近郊レースニッツ(Lößnitz)村で没した。著作として、『世界周航日本への旅』*Reise um die Erde nach Japan, an Bord der Expeditions-Escadre unter Commandore M. C. Perry in den Jahren 1853, 1854 und 1855, unternommen im Auftrage der Regierung der Vereinigten Staaten*, 2 Bde., Leipzig/New York 1856(日本関係部分の翻訳:中井晶夫、『ハイネ世界周航日本への旅』, 雄松堂書店 1983); 『日本とその住民』*Japan und seine Bewohner. Geschichtliche Rückblicke und ethono-*

graphische Schilderungen von Land und Leute, Leipzig 1860 ; 『北半球世界旅行』 *Eine Weltreise um die nördliche Hemisphäre in Verbindung mit der Ostasiatischen Expedition in den Jahren 1860 und 1861*, 2 Bde., Leipzig 1864 ; 『日本. 国土と住民の研究』 *Japan. Beiträge zur Kenntnis des Landes und seiner Bewohner*, Berlin 1873, 3. Aufl., unter dem Titel: *Japan. Wie es wirklich ist*, ergänzt von M. Klittke, 1904 (これにはプロイセン使節団時代の彼のスケッチ50点が含まれる)がある。しかし、彼の日本関連記述には誤りが多い、とされている⁽¹⁾。

(注1) 武内 1995, p. 289 ; 宮永 1993, pp. 57-60 ; 佐藤 1985, pp. 80-99 ; 中井 1969, pp. 370-371 ; 中井 1983(1), pp. 26-45 ; 中井 1983(2), pp. 363-398 ; 今宮 1971, pp. 57-58, 71, 210-212, 216, 223-225 ; 佐藤 1988(1), pp. 89-101 ; 佐藤 1988(2), p. 87 ; 宮永 1986, pp. 185, 190.

⑳ ハース (Hans HAAS, 1868—1934)

彼はバイエルンのドンドルフ (Donndorf) 村で建築家の子として生まれ、エルランゲン大学で神学と古典哲学を学んだ。東洋諸語の研修を2年間受けて、1898年来日し、ドイツ福音教会牧師(東京と横浜)、また、新教神学校(東京)校長となった。1903年には東大文学部でドイツ語を教えた。同年にシュトラースブルク大学から神学博士の学位を取得した。09年に帰国して、15年にライプツィヒ大学神学部教授となった。論文、「天理教. 現代日本の複合的新宗教」, “Tenrikyo: ein neues synkretistisches Religionsgebilde im Japan unserer Tage”, in: *Missionskunde und Religionswissenschaft*, Bd. 25, 1910 (富永牧太・訳, 『天理教』, 天理図書館 1933=『天理図書館参考資料 2』), 著書, 『日本キリスト教史』 *Geschichte des Christentums in Japan*, Tokyo 1902 ; 『日本仏教の諸宗派』 *Die Sekten des japanischen Buddhismus*, Heidelberg 1905など、日本の諸宗教(神道、儒教を含む)について、多くの著作を発表し、ライプツィヒで没した⁽¹⁾。

(注1) 武内 1995, p. 298 ; 富永 1933, pp. 1-3 ; 大久保 1976, pp. 91-93, i-ii ; NDB, Bd. 7, S. 375 ; GV (1), Bd. 39, S. 192 ; GV (1), Bd. 53, S. 39.

(29) ハミツチュ (Horst HAMMITZSCH, 1909—1991)

彼は、建築家の子として、そして、アドルフ・ヒトラーの義弟の甥として、ドレーズデンで生まれた。1929年からライプツィヒ大学で学び、『倭姫命世記』*Yamato-Hime No Mikoto Seiki. Bericht über den Erdenwandel Ihrer Hoheit der Prinzessin Yamato. Eine Quelle zur Frühgeschichte der Shinto-Religion*, Diss. Leipzig 1937によって哲学博士となった。33年から八高(名古屋)ドイツ語講師、41年からライプツィヒ大学助教授・日本学研究所所長(44—45年には同教授)、大戦後にはミュンヘン大学を経て、66年からボーフム大学日本学教授となった。最後の住所はヴェストファーレンのエニガーロー(Ennigerloh)であったが、没地は不明である。代表的な著書として、『茶道における禅』*Zen in der Kunst der Tee-Zeremonie*, 1977; 7. Aufl., München 1994(これは英語, ポルトガル語, オランダ語に翻訳された), 編著として、『日本便覧』*Japan-Handbuch*, 1981, 3. Aufl., Stuttgart 1990がある⁽¹⁾。

(注1) Hammitzsch 1937, Lebenslauf; Kürschners Kalender 1992, S. 1236-1237; Worm 1994, S. 174-178; テュービンゲン大学回答; ボーフム大学回答。

(30) ハルティヒ (Georg HARTIG, 18??—1???)

生地不明の彼はドレーズデンの羊毛紡績工業の代表として、1896—97年のアジア通商視察団(ジャンツの項を参照)に参加した⁽¹⁾。ただし、ドレーズデン市立文書館からの回答によれば、彼の名は1894—1905年の刊行住所録に記載されていない。

(注1) Rauck 1988, S. 245.

(31) ヒルゲンドルフ (Franz HILGENDORF, 1839—1904)

彼は商人の子としてブランデンブルク州ノイダム(Neudamm)市で生まれ、1863年にテュービンゲン大学で哲学博士の学位を得た。ベルリン動物学博物館・館員などを経て、71年に、当時ドレーズデンにあった皇帝レオポルド・カルル記念ドイツ自然科学院(Kaiserliche Leopoldinisch-Carolinische

Deutsche Akademie der Naturforscher) の図書館長となり、ドレーズデン工業専門学校動物学講師を兼ねた。73年に東京医学校（東大医学部の前身）予科教師として来日し、76年まで動物学などを教授した。彼は74年夏の北海道旅行の際に、旧秋田藩士による函館駐在ドイツ領事ハーバー（Ludwig Haber, 1843—74）の暗殺に遭遇した。帰国後は再びベルリン動物学博物館・館員、80年には主事となり、没するまでその職にあった。彼は93年には教授の称号を与えられた。彼の動物学論文のあるものは、日本滞在中に収集した標本を基にしている⁽¹⁾。

(注1) 武内 1995, pp. 341-342; 磯野 1986, pp. 25-35; 上野 1991, pp. 343-351; 宮永 1993, pp. 411-412; Weltner 1906, S. I-XII.

② フェルマー (Helmut FELLNER, 1908—1977)

彼はドレーズデンで生まれ、1928年にドレーズデン音楽大学を卒業し、ヴァイマルのドイツ国民劇場・副指揮者、チューリングン邦立アルテンブルク劇場指揮者を経て、38年から45年8月まで東京音楽学校教師（指揮法および作曲）となった。帰国後は州立カッセル劇場指揮者、ヴッパータール・ゾーリングン市立劇場指揮者、ブレーマーハーフェン市立劇場指揮者を経て、65年から74年までハンブルク州立歌劇場の合唱指揮者であった⁽¹⁾。

(注1) 音楽大事典 1982, p. 2076; 音楽辞典 1991, p. 1568; 高野 1974, pp. 116-117 (Förner); Kürschners Handbuch 1956, S. 164-165; 東京芸術大学回答; ブレーマーハーフェン市立文書館回答; ハンブルク州立歌劇場回答。

③ フーブリヒト (Manfred HUBRICHT, 1930—)

彼は鞍工の子としてドレーズデンに生まれ、同市の高等学校を経て、1949—53年にベルリン・フンボルト大学で日本学などを学び、53年にハンブルク大学に移り、『正岡子規の俳論』*Die Haiku-Poetik des Masaoka Shiki*, Diss. Hamburg 1955によって哲学博士となった。寺山修司の長編小説『ああ荒野』（現代評論社 1966）の翻訳 *... vor meinen Augen ... eine Wildnis ...: Roman* を、71年に Fischer 出版社 (Frankfurt/M.) から出版し

た。72—75年に岡山大学法文学部の、75—80年に京大教養部の、ドイツ語担当外国人教師となった。85年に京都産業大学世界問題研究所・教授となり、87年から同大学法学部・教授（法社会学）に転じた⁽¹⁾。

（注1）文部省 1972, p. 1050；文部省 1974, p. 1140；文部省 1975, p. 978；文部省 1979, p. 1250；大学職員録 1985(2), p. 1134；大学職員録 1987(2), p. 1189；大学職員録 1996(2), p. 1091；ハンブルク大学図書館回答；寺山修司記念館回答。

③4 フラック (Johan Georg FLACKE, 17??—1???)

彼はライプツィヒ出身で、1785—86年に長崎・出島蘭館の上級医師であった⁽¹⁾。それ以外のことは不明である。なお、Johan は Johann であろう。ただし、ザクセン州立ライプツィヒ文書館付属ドイツ系譜学センターによれば、ライプツィヒ市の教会記録簿に Flacke 姓の家族は記録されていない。

（注1）Kraas 1992, S. 6.

③5 フランク (Louis FRANK, 1886—1973)

彼は商人の子としてライプツィヒで生まれ、1909年に化学に関する論文でベルリン大学哲学博士となり、10年に同大学工芸学助教、13年に来日して、小樽高商・講師となり、13年間、商品学と商品実験を、後にはドイツ語や英語を教授した。彼は、我が国における商品理化学の実質的創始者であった。26年から山梨高等工業・講師となり、17年あまり電気化学とドイツ語を教えた。43年にユダヤ系として実質的に罷免され、後には収容所に収容された。49年に米国に移住して、アーカンソー州のフィランダー・スミス・カレッジ教師となり、サンフランシスコで没した⁽¹⁾。

（注1）武内 1995, p. 380；斎藤 1985, pp. 17-18；フランク先生 1986, p. 52；石井 1986, p. 71；鎌倉 1990, pp. 46-47；Frank 1909, Lebenslauf.

③6 ヘリテルあるいはヘルテル (Fritz [Friedrich] HÄRTEL, 1877—1940)
(ヘルテル)

彼は建築家の子として西南ザクセンのプラウエン (Plauen) 市で生まれ、ミュンヘン大学などで法学と医学を学び、ミュンヘン大学で医学博士の

学位を得た。1913年からハレ大学外科教室に医局長として勤務（17年に教授資格取得）したのち、22年来日して、大阪医大（阪大医学部の前身）講師・第一外科主任として、多くの優れた医師を養成した。講義のドイツ語はザクセン訛りが甚だしかったという。30年に帰国して、ベルリーン市立オスカル・ツィーテン病院（städtisches Oskar-Zieten-Krankenhaus）外科部長となり、リヒテンベルグで没した⁽¹⁾。

（注1）武内 1995, pp. 421-422；ヘルテル先生 1950, pp. 16-17, 19, 28, 69；Wer 1935, S. 577。このリヒテンベルクは、旧東ベルリーン市の一部の Lichtenberg (Brockhaus 1990, S. 365) であろうか。

(37) ベルツ (Erwin (1905: von) BÄLZ, 1849—1913)

彼は西南ドイツのビーティヒハイム (Bietigheim) 市で建築家の子として生まれ、1866年にチュービンゲン大学入学、69年にライプツィヒ大学に転じ、内科教授カルル・ヴンダーリヒに師事した。72年に博士号を取得し、ヴンダーリヒの助手、次いで、76年に講師となった。その76年に東京医学校（東大医学部の前身）教師に招聘された。80年代後半に、東京生まれの荒井はつ（後に花と呼ばれた）と結婚した。ベルツはルター派であったので、1905年、日本を離れる直前に、花はルター派の洗礼を受け、ベルツ夫妻は改めて教会で結婚式を挙げた。これを執り行なった牧師は、上述のハースである。ベルツは東大に26年間勤務して、日本医学の父と称された。1902年に東大を退任したが、さらに3年間、宮内省待医を勤めた。彼は日本滞在中に寄生虫病、脚気（彼はこれを伝染病と考えていた）、温泉の効用、日本人の人類学的特徴などについて、多くの著書・論文を発表した。彼は外国人としては破格の旭日大綬章を05年に授与されて、帰国し、主として民族学者として活動し、シュトゥットガルトで没した。彼の日本研究の成果は『ベルツの日記』（岩波文庫）に記録されている。彼は、日本で収集した美術・工芸品を、シュトゥットガルトのヴェルテンベルク邦立産業博物館とベルリーンの民俗博物館に寄贈した⁽¹⁾。なお、『ザクセン国勢便覧』では、彼は1894年まで継続

して、ライプツィヒ大学医学部講師と記載されている⁽²⁾。

(注1) 武内 1995, pp. 424-426; ショットレンダー 1971, pp. 27-34, 73-82, 91-121, 124-176; ヴェスコヴィ 1974, pp. 12-14, 44-47, 56, 64-65, 70-73, 92, 95-96, 106-109, 129, 144-147 (著作目録); 安井 1995, pp. 11-13, 14-15; 23-26, 28-33, 35, 189-198, 316-318, 358, 361-362, 367, 370-421; NDB, Bd. 1, S. 520; Vianden 1985, S. 134.

(注2) Vgl. SHB 1894, S. 597.

③⑧ ベルリーナー (Siegfried [Sigfrid] BERLINER, 1884—1961)

彼は商業学校校長の子として北ドイツのハノーファー市で生まれ、ライプツィヒ大学などで数学と経済学を学び、鑄鉄の負荷反応に関する論文で1906年にゲッティンゲン大学哲学博士となり、08年にライプツィヒ大学講師となった。13年に東大法学部教師に招かれた。14年に彼は第一次大戦のために帰国したが、20年に再び来日して、東大経済学部・国際金融論教師となった。25年に帰国して、ライプツィヒのドイツ＝ロイド生命保険・重役(38年まで)となり、27年からはライプツィヒ商業大学教授を兼任した。彼は38年に米国に亡命し、39年にワシントン特別区のハーワード大学教授となり、シカゴなどの保険会社の重役を兼ねた。52年に名誉教授となった後、オレゴン州フォレストグロウヴ (Forest Grove) で没した。著書として、『日本輸入貿易の組織と経営』 *Organisation und Betrieb des japanischen Importhandels*, Hannover 1920がある⁽¹⁾。

(注1) 武内 1995, p. 428; 東大・経済 1976, pp. 622-623, 1123-1124; Berliner 1906, Vita; Strauss 1983, pp. 93-94.

③⑨ ベーレント (Martin BEHREND, 1865—1926)

彼はプロイセン東部のケーニヒスベルク市近郊で生まれ、ライプツィヒ大学などで学んだ後、ドレーズデンで統計実務家として、次いで、ツィッタウ市で商工会議所書記として勤務した。1896年にマクデブルク商業会議所法律顧問、1909年にマンハイム商業大学経済学教授となった。彼は13年来日し、満鉄・調査部・顧問、ドイツ東アジア博物学・民族学研究協会 (OAG)

会長となった。第一次大戦の勃発のために帰国して、旧職に復帰し、同地で没した⁽¹⁾。

(注1) Who 1915, p. 5; Wer 1922, S. 85-86; Schott 1926, S. 3, 5, 9, 11.

(40) マイステル (Georg [George] MEISTER, 1653-1713) (マイスター)

彼はテューリンゲンのゾンダースハウゼン (Sondershausen) 市で生まれ、1675年からザクセンのフォン・エーバーシュタイン (Albrecht von Eberstein) 元帥に庭師として仕えた後、77年にオランダ東インド会社船でアジアに出航した。ドイツ人 (カッセル出身) 医師で、植物収集家のクライアー (Andreas Cleyer, 1634-97/98) は、オランダ東インド会社の長崎商館長として1682-83, 85-86年に二度来日した。二度とも彼は庭師としてマイスターを同行させた。二人は植物を採集し、あるいは、日本人から多くの植物図を入手し、植物の利用法について質疑応答を重ねた。マイスターは88年に帰郷し、89年にはザクセン選帝侯 (94年からはアウグスト強健侯) の「東洋風造園家」に任ぜられて、ドレスデンの庭園の外来植物の管理を委ねられ、没するまで、その職にあった。彼の書物、『東洋=インド風造園家』*Der Orientalisch-Indianische Kunst- und Lust-Gärtner*, Dresden 1692は版を重ね、1731年に第5版が出版された (複製版 Weimar 1972)。この書物の植物図はその後しばしば引用された。また、この書物は、簡単な独和辞書と独和対照会話文を含み、仮名と数字の日本語発音を示している⁽¹⁾。

(注1) 宮永 1993, pp. 30-31, 33; ADB, Bd. 21, S. 254; Michel 1986, pp. 1-50 (独和会話文の詳細な分析を含む)。

(41) マルチン (C. F. MARTIN, 1832-1???) (マルティン)

生地不明の彼は、上記テンツラーと同じように、チユムニク (ケムニッツ) 市の「セフジセ機械製造場」あるいは「サキソニー (あるいはサキソン) 器械製作所」あるいは「ゼクジツシエ・マシーネン・フアブリック」の機械技師であった。まず、1876年から77年まで内務省・新町紡績所 (群馬県) で、次いで、77年から79年まで内務省・千住製絨所で、同社製の蒸気機

関(新町で40馬力, 千住で70馬力) 据え付けを指導した⁽¹⁾。この機械製作所が(株)ザクセン機械製作所 Sächsische Maschinenfabrik A.-G. であるとすれば、これは、ハルトマン(Richard Hartmann, 1809—1878)が創設した、当時のザクセンで最大の機械製作工場であった⁽²⁾。陸軍省小銃製造所(東京)に1923年に使用されていた工作機械の中で、購入時期最古(1872年)の旋盤2台とフライス盤2台を含め、1892年(大部分は1881年)までに合計28台を納入した「リシャルド・ハントマン⁽³⁾」は、この工場のことであろう。また、千住製絨所は創業に当たって、ケムニッツの「サツキセン号織機製造場」あるいは「ゼクジツシエ・ウエブスツール・フアブリック」から紡毛機6台、整紡機6台と織機42台を購入し、マルティンはテンツラーとともに機械の据え付けを指導した⁽⁴⁾。ケムニッツ市立文書館の回答によれば、マルティンの名を同市の刊行住所録で確定することも、同市におけるその後の彼の経歴を知ることもできない。なお、東京砲兵工廠における80—81年の機械据え付けに関して、ペールあるいはペール(ネットーの項を参照)とともに同工廠に出入りしたが、陸軍省・雇いかどうか不明の「機械師マルチン」(陸軍雇独逸人・一覧表)は、上記マルティンと同一人物であろう⁽⁵⁾。

(注1) 陸軍雇独逸人, 個人略歴; 千住 1928, pp. 4, 36; 岡本 1983, pp. 29-30, 34, 42-44, 60, 63, 76, 137, 141, 144-146, 158, 181.

(注2) 幸田 1994, p. 64.

(注3) 長沢 1953, pp. 393-394. さらに, 幸田 1994, p. 90を参照.

(注4) 千住 1928, pp. 4-5; 岡本 1983, pp. 30-34, 42, 59.

(注5) 中村 1973, p. 239.

(42) ミュラー (Max MÜLLER, 1870—19??)

彼は農業者の子として南ザクセンのマルバッハ (Marbach) 村で生まれ、父の遺産の農場を経営した後、1898年にライプツィヒ大学農学士となり、翌99年まで同大学獣医学研究所助手を勤めた。さらにベルリン大学とベルリン農業大学で学び、1903年に哲学博士の学位、07年に教授資格を得た。04—08年にはベルリン農業大学助手であった。11年に東北大学農学部(札

幌)・畜産学教師に招かれた(14年まで)⁽¹⁾。帰国後の消息は不明である。帰国直後の彼の論文、「北海道あるいは蝦夷の研究」“Beiträge zur Kenntnis der Insel Hokkaido oder Jesso”, in: *Zeitschrift der Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin*, Jg. 1915—16, では、ベルリール農業大学講師と記されている。この大学は、フンボルト大学文書館の回答によれば、後にフンボルト大学農学部となったが、同学部の文書は第二次大戦の戦災で失われた。

(注1) Müller 1903, Curriculum vitae; 北海道大学北方資料室回答。

(43) メッゲルあるいはメッツゲル (Adolf MEZGER, 18??—1899) (メツガー)

彼はハイデルベルク市の医師の子として生まれた。1856年から58年までフライベルク鉱業大学で学んだ後、彼はロシアのオレンブルク (Orenburg) で鉱山官吏として働き、78年から82年まで工部省お雇い外国人として秋田県阿仁鉱山の近代化を指導した。82年の夏には、三菱商会吉岡銅山 (岡山県成羽町) の近代化に関与した。同年9月から翌年まで約1年間、一時帰国中のネッター (上記参照) の代理として、彼は東大理学部で採鉱・冶金学を講義した。83年の帰国から85年まで、西南ザクセンのツヴィッカウ市で、90年から米国で活動した。没したのはフライベルクである。論文として、「阿仁の気象」“Tägliche meteorologische Beobachtungen für 1880—1881, angestellt in Ani”, in: *OAGM*, H. 25, 1881, H. 27, 1882; 「日本鉱山・冶金論」“Einiges über Bergbau und Hüttenwesen in Japan”, in: *OAGM*, H. 30, 1884がある⁽¹⁾。

(注1) 武内 1995, p. 490; 吉城 1981, pp. 367—372, 374; 八田 1982; 大塚 1985, pp. 9—12; 植田 1990, p. 11; 藤原 1995, pp. 98, 100; フライベルク鉱業大学文書館回答。Vgl. Schiffner 1935, S. 113.

(44) モスレ (Alexander Georg MOSLE [MOSLÉ], 1863—1949)

彼はブレーメン市の商人の子で、1884年に東京に来て、最初はドイツ系企業に勤務し、88年に自立した。クルップ社とベルギーのコックリル社の代理

人として、日本の弾薬輸入において重要な役割を果たした。1907年に帰国して、ライプツィヒに住み、日本の名誉領事となった。1935年に米国に移住し、ニューヨークで没した。著作として、「日本と世界政策におけるその地位」“Japan und seine Stellung in der Weltpolitik”, in: *Meereskunde*, Bd. 11, Berlin 1917などがある⁽¹⁾。

(注1) Rauck 1988, S. 75, 387-388, 483.

(45) ヤーン (Erwin JAHN, 1890—1964)

彼はライプツィヒで生まれ、1909年からライプツィヒ大学で哲学と歴史を学んだ。14年にライプツィヒ大学から学位を取得し、同市実科商業学校教授兼ライプツィヒ大学新聞研究所講師となった。彼は24年来日し、山口高、静岡高（この時から東大文学部講師兼務）、一高でドイツ語を教授した。39年から京大文学部講師兼三高講師となった。51—59年には南山大学文学部教授であった。離日後、南ドイツのトリリーア市に隠棲した。彼は日本文化、とくに俳句を愛した。著書に、『日本と三人のドイツ人——ケーベル、シーボルト、ベルツ』（白水社 1943年）などがある⁽¹⁾。

(注1) 武内 1995, p. 505; 星野 1985, pp. 81-82; 古賀 1980, pp. 199-207. ただし、彼の学位論文 Jahn 1914, Vita には、父の職業が記載されていない。

(46) ユーバーシャール (Johannes [Hans] ÜBERSCHAAR, 1885—1965)

彼はマイセン市で商人の子として生まれ、1906年からライプツィヒ大学で学び、『日本における天皇の地位』*Die Stellung des Kaisers in Japan*, Diss. Leipzig 1912によって哲学博士の学位を受けた。12年来日して、大阪高等医学校のドイツ語・ラテン語教師となった（14年まで）。19—30年に再び大阪高等医学校教師、25—32年には京大文学部講師となった。彼は32年に帰国して、ライプツィヒ大学教授、同大学日本学研究所・初代所長となった。37年にナチスを避けて来日し、天理外国語学校講師、39年から甲南高校講師となり、52年から死去するまで、甲南大学文学部教授であった。著書に、『日本政治の特性』*Die Eigenart der japanischen Staatskultur*, Leipzig 1925;

『芭蕉と奥の細道』 *Basho (1644—1694) und sein Tagebuch Okunohosomiti*, Tokyo 1935などがある⁽¹⁾。

(注1) ユーバーシャール教授 1968, pp. iv-v ; GV (2), Bd. 135, S. 40-41 ; Überschaar 1912, Lebenslauf.

(47) ユンケル (Emil JUNKER, 1864—1927) (ユンカー)

彼はザクセン (詳細不明) で生まれ、1886年来日して、神戸の商会の社員、間もなく四高 (金沢) のドイツ語教師となった。さらに、神戸のジャパン・クロニクル紙の支配人を経て、東京に移り、一高、独逸学協会学校、拓殖大学などでドイツ語を教えた。彼は長期に亘って日本のドイツ語教育界に貢献し、東京で没した⁽¹⁾。

(注1) 武内 1995, p. 509 ; ユンケル氏 1927, p. 361.

(48) レックス伯爵 (Arthur Graf von REX, 1856—1926)

彼は、ドレースデンの南方、ピルナ市近郊の騎士農場ツェヒスタ (Zehista) を所有する、ザクセンの名門貴族の退役中尉を父として、ドレースデンで生まれ、ライプツィヒ大学などで法律を学んだ後、1882年にドイツ帝国外務省にはいった。中国駐在公使を経て、1911年に日本駐在公使となり、第一次大戦勃発のために14年に帰国、間もなく退職し、スイスのフリムス・ヴェルトハウス (Flims-Waldhaus) で没した⁽¹⁾。

(注1) Schwalbe 1974, S. 75-82 ; Gotha 1909, S. 731 ; Hofmann 1901, S. 216-217 ; Verloren 1910, S. 432.

(49) レーンホルム (Ludwig Hermann LÖNHOLM, 1854—1928年以後)

彼 (旧姓 SCHMIDT-LÖNHOLM) は、西南ザクセンのマルク=ノイキルヒェン (Mark-Neukirchen) 市で生まれ、1878年にライプツィヒ大学法学部における国家試験に、83年に第二次試験に合格して、ペーガウ (Pegau) 区裁判所の判事補に、85年にはライプツィヒ地方裁判所判事 (98年に同地方裁判所部長の、1906年に枢密参事官の称号賦与) に任ぜられたが、89年来日し、独逸学協会学校の法学教師となった。90年から東大法学部ドイツ法教師

となり、その後21年間在職した。彼はまた、司法省顧問を兼任し、日本の民法・商法・刑法などを英語・ドイツ語・フランス語に翻訳した。*Bürgerliches Gesetzbuch für Japan*, 3 Bde., Tokyo 1897-98; *The Civil Code of Japan*, Tokyo 1898; *The Commercial Code of Japan*, Tokyo 1899; *Japanisches Handelsgesetzbuch*, Tokyo 1899; *Code de commerce de l'empire du Japon*, Tokyo/Paris 1899; *Code civil de l'empire du Japon*, Tokyo/Paris 1902; *Das neue japanische Strafgesetzbuch*, Yokohama 1907; *Code pénal de l'empire du Japon*, Yokohama 1907⁽¹⁾ などである。東大退職後、米国に移住したが、1928年にはロサンジェルスで経済的に困窮していた。その後の消息は不明である⁽²⁾。

(注1) GV (1), Bd. 90, S. 145; BLC, Vol. 163, p. 429; NUC, Vol. 338, pp. 287-288.

(注2) 武内 1995, pp. 557-558; SAD, Nr. 5156; レーンホルム氏 1928.

50) ワーヘナールあるいはヴァーゲネル (Zacharias WAGNER, 1614—1668) (ヴァーグナー)

彼は、都市裁判官 (Stadttrichter) の子としてドレスデンで生まれ、銅版画家を志して、1633年に故郷を離れ、アムステルダムに赴いた。34年には南米ブラジルに行き、オランダ西インド会社の画家となり、41年に帰郷した。翌年に再び故郷を出て、オランダからインドネシア・バタビアに渡って、オランダ東インド会社の書記となった。彼は51年にバタビア総督の法務顧問官に、56—57年と58—59年の2回、長崎 (出島) 商館長に任ぜられた。彼は第1回江戸参府の際に、明暦の大火に遭遇した。約25年後に出島にきたマイスター (上記参照) によれば、ヴァーグナーは短気な「雷男」として日本人になお記憶されていた。61—66年にヴァーグナーは南アフリカ・希望峰植民地の第二代司令官に任命された。68年に、オランダに帰って間もなく、アムステルダムで没した⁽¹⁾。オランダ東インド会社は1650年に肥前磁器の輸出を開始したが、それを本格化させ、とくに、オランダ本国への輸出を開始 (約5,600点で、その45%は五彩磁器) したのは、1659年であった。59年の商

館長ヴァーグナーの送り状（合計約34千点）がそれを立証している⁽²⁾。ヴァーグナーが57年にバタビアに送った日本磁器の見本1箱は、本国に転送された。58年にヴァーグナーは、「以前には日本人は磁器を中国人から入手しなければならなかったにもかかわらず」、本年には15隻の中国船が大量の日本産「粗製」磁器をアモイに輸出した、と報告している。59年に彼は、さまざまな種類の最も美しく最も上質の日本製品を、折々に買い集めてきたこと、バタヴィアに今回送られるすべての種類の日本磁器に関して、同種の製品がオランダあるいはバタヴィアから買い付けを要求される場合に備えて、番号を付けた見本1点を出島に残していること、を報告した。さらに彼は以下のことも報告した。オランダ人ばかりでなく、中国人も上質の磁器を毎年求め、船積みすることを知っている日本人は、上質の白色粘土が得られる肥前地方で、全力を尽くして、磁器を生産し、販売を開始した。彼らが年毎に技術を改良し、さらに熟達しつつあることも、自分は知っている、と。磁器見本の一つは、ヴァーグナー自身の図案で、青地に銀彩の唐草文を描いたものであった。しかも、彼が驚愕したことには、その納入期限より1カ月も前に、ほぼ同じ種類の磁器が、彼の発注した陶工以外から、出島に夥しく運び込まれたのであった⁽³⁾。このようにしてヴァーグナーは肥前磁器興隆史の証言者となったが、この肥前磁器が半世紀余り後にヨーロッパ最初の硬質磁器＝マイセン磁器に影響を与えるとは、彼は想像もしていなかったであろう。

(注1) ADB, Bd. 40, S. 585-586; ザンドフリート 1987, pp. 12-19; Michel 1987, S. 53-102 (彼の日記と詳細な注を含む); ミヒェル 1996(2), pp. 87-90.

(注2) 山脇 1988, pp. 265-266, 278, 285-288, 295, 297-298, 402.

(注3) ザンドフリート 1987, p. 16; ヨルグ 1987, pp. 43-44; Volker 1954, pp. 127-128, 132, 136-137. さらに、フォルカー 1981(26), p. 60; 1982(27), pp. 64, 67; 1982(28), pp. 61-62を参照.

(3) 注引用文献目録

- ADB = *Allgemeine Deutsche Biographie*, Leipzig.
- Berliner 1906 = Sigfrid Berliner, *Über das Verhalten des Gußeisens bei langsamen Belastungswechseln*, Diss. Göttingen.
- Blaschke 1957 = Karlheinz Blaschke (Hrsg.), *Historisches Ortsverzeichnis von Sachsen*, Leipzig.
- BLC = *The British Library General Catalogue of Printed Books to 1975*, London.
- Brockhaus 1990 = *Brockhaus-Enzyklopädie*, 19. Aufl., Bd. 13, Mannheim.
- Curt Netto 1981 = *Die glücklichen Augen. Der Zeichner und Aquarellist Curt Netto. Eine Ausstellung der Museumsgesellschaft Kronberg und der Metallgesellschaft AG. 18. Mai—8. Juni 1981*, Frankfurt am Main.
- DBE 1995 = *Deutsche Biographische Enzyklopädie*, Bd. 4, München.
- DBJ 1930 = *Deutsches Biographisches Jahrbuch*, Bd. 5, Berlin/Leipzig.
- Foreign wives 1996 = *Stories of early foreign wives of Japanese* (『遙かなる波の音 外国人妻達の歳月』), Tokyo, International Videoworks.
- Frank 1909 = Louis Frank, *Über Pyrrolidonderivate*, Diss. Berlin.
- Geschlechterbuch 1926 = *Deutsches Geschlechterbuch. Genealogisches Handbuch bürgerlicher Familien*, Bd. 49, Görlitz.
- Goch 1980 = Ulrich Goch, "Zur Erinnerung an den Japanologen Clemens Scharschmidt (1880-1945)", in: *Bochumer Jahrbuch zur Ostasienforschung*, Bd. 2.
- Gotha 1909 = *Genealogisches Handbuch der Gräflichen Häuser*, Gotha.
- GV (1) = *Gesamtverzeichnis des deutschsprachigen Schrifttums 1700-1910*, München/New York/London/Paris.
- GV (2) = *Gesamtverzeichnis des deutschsprachigen Schrifttums 1911-1965*, München/New York/London/Paris.
- Hammitzsch 1937 = Horst Hammitzsch, *Yamato-Hime No Mikoto. Bericht über den Erdenwandel Ihrer Hoheit der Prinzessin Yamato. Eine Quelle zur Frühgeschichte der Shinto-Religion*, Diss. Leipzig.
- Hofmann 1901 = H. L. Hofmann, *Die Rittergüter des Königreichs Sachsen*, Dresden.
- Jahn 1914 = Erwin Jahn, *Die 'Volksmärchen der Deutschen' von Johann Karl August Musäus*, Diss. Leipzig.
- Kleint 1993 = Christian Kleint/Gerald Wiemers (Hrsg.), *Werner Heisenberg in Leipzig 1927-1942*, Leipzig. (*Abhandlungen der Sächsischen Akademie der Wissenschaften zu Leipzig, Mathematisch-naturwissenschaftliche Klasse*, Bd. 58, Heft 2.)
- Kosch 1963 = Wilhelm Kosch (Hrsg.), *Biographisches Staatshandbuch. Lexikon der Politik, Presse und Publizistik*, Bern/München.
- Kraas 1992 = E(rnst) Kraas/Y(oshiki) Hiki (Hrsg.), *300 Jahre deutsch-japanische Be-*

- ziehungen in der Medizin*, Berlin.
- Kürschners Handbuch 1956 = *Kürschners Biographisches Theater-Handbuch*, Berlin.
- Kürschners Kalender 1992 = *Kürschners Deutscher Gelehrten-Kalender*, 16. Ausgabe, Berlin.
- Meissner 1961 = Kurt Meissner, *Deutsche in Japan 1639-1960*, Tokyo.
- Michel 1986 = Wolfgang Michel, "Die Japanisch-Studien des Georg Meister (1653-1713)", in: 『独仏文学研究』, 36号.
- Michel 1987 = Wolfgang Michel, "Zacharias Wagner und Japan (I). Ein Auszug aus dem Journal des 'Donnersmanns'", in: 『独仏文学研究』, 37号.
- Michel 1990(1) = Wolfgang Michel, "Caspar Schambergers Lebens-Lauf", in: 『言語文化論究』, 1号.
- Michel 1993 = Wolfgang Michel, "Caspar Schamberger (1623-1706). Heimkehr und Leben in Leipzig", in: 『独仏文学研究』, 43号.
- Michel 1994 = Wolfgang Michel, "Caspar Schambergers Aktivitäten als Barbierchirurg in Japan", in: 『独仏文学研究』, 44号.
- Michel 1995(1) = Wolfgang Michel, "Caspar Schambergers Kindheit und Jugend", in: 『独仏文学研究』, 45号.
- Müller 1903 = Max Müller, *Studien über den Einfluß des Futters auf die Milch- besonders auf die Milchfettproduktion*, Diss. Berlin.
- Nachod 1897 = Oskar Nachod, *Die Beziehungen der Niederländischen Ostindischen Kompagnie zu Japan im 17. Jahrhundert*, Diss. Rostock.
- NDB = *Neue Deutsche Biographie*, Berlin.
- NUC = *National Union Catalog Pre-1956 Imprints*, London/Chicago.
- OAGM = *Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens*.
- Rauck 1988 = Michael Rauck, *Die Beziehungen zwischen Japan und Deutschland 1859-1914*, Diss. Erlangen-Nürnberg.
- Rauck 1994 = Michael Rauck, *Japanese in the German Language and Cultural Area, 1865-1914. A General Survey*, Tokyo. (*Tokyo Metropolitan University Economic Society Research Series*, No. 2.)
- Reichshandbuch 1931 = *Reichshandbuch der Deutschen Gesellschaft*, Bd. 2, Berlin.
- SAD Nr. 4733 = Sächsisches Hauptstaatsarchiv Dresden, Außenministerium, Nr. 4733, Acta, Kommandierung von Offizieren ins Ausland betr., 1907-14.
- SAD Nr. 5156 = Sächsisches Hauptstaatsarchiv Dresden, Außenministerium, Nr. 5156, Aktenfaszikel, Anstellungen im Auslande betr., Japan, Prof. Dr. Schmidt-Lönholm, 1884-1913.
- Schiffner 1935, 1938 = C[arl] Schiffner, *Aus dem Leben alter Freiburger Bergstudenten*, 2 Bde., Freiberg Sa.
- Schott 1926 = Sigmund Schott, *Professor Dr. Martin Behrend. Gedächtnisworte*, Mann-

- heim.
- Schwalbe 1974 = Hans Schwalbe/Heinrich Seemann (Hrsg.), "Deutsche Botschafter in Japan 1860-1973", in: *OAGM*, H. 57.
- SHB = *Staatshandbuch für das Königreich Sachsen*, Dresden.
- Strauss 1983 = Herbert A. Strauss/Werner Röder (eds.), *International Biographical Dictionary of Central European Emigrés 1933-1945*, II /1, München/New York/London/Paris.
- Überschaar 1912 = Johannes (Hans) Überschaar, *Die Stellung des Kaisers in Japan*, Diss. Leipzig.
- Verlohren 1910 = Heinrich August Verlohren (Hrsg.), *Stammregister und Chronik der Kur- und Königlich Sächsischen Armee von 1670 bis zum Beginn des 20. Jahrhunderts*, Leipzig.
- Vianden 1985 = Hermann Heinrich Vianden, *Die Einführung der deutschen Medizin im Japan der Meiji-Zeit*, Düsseldorf.
- Volker 1954 = T. Volker, *Porcelain and the Dutch East India Company*, Leiden.
- Weltner 1906 = W[ilhelm] Weltner, "Franz Hilgendorf. 5. 12. 1839—5. 7. 1904", in: *Archiv für Naturgeschichte*, Bd. 72.
- Wer 1922, 1935 = *Wer ist's*, 8. Ausg. (Leipzig 1922), 10. Ausg. (Berlin 1935).
- Who 1915 = *Who's who in Japan*, 4th ed., Tokyo.
- Worm 1994 = Herbert Worm, "Japanologie im Nationalsozialismus", in: Gerhard Krebs/Bernd Martin (Hrsg.), *Formierung und Fall der Achse Berlin-Tokyo*, München.
- 吾妻 1974 = 吾妻潔, 「クルト・ネッター先生の業績とその背景」, 鹿島卯女 (編), 『明治の夜明け——クルト・ネッターのスケッチより』, 鹿島出版会, 所収.
- 五十嵐 1986 = 五十嵐一, 「反転的鎖国論」, 『現代思想』, 14巻10号.
- 池上 1981 = 池上忠治, 「サミュエル・ビング小伝」, ビング 1981, 所収.
- 池守 1993 = 池守清吉, 「E. ナウマン博士の叙勲」, 『地質ニュース』, 461号.
- 石井 1986 = 石井澄男, 「故フランク先生の生誕百年記念によせて」, 『山梨工業会会報』, 63号.
- 磯野 1986 = 磯野直秀, 「お雇いドイツ人博物学教師」, 『慶応義塾大学日吉紀要 自然科学』, 2号.
- 今宮 1971 = 今宮新, 『初期日独通交史の研究』, 鹿島出版会.
- 植田 1987 = 植田晃一, 「帰国後のクルト・ネッター」, 『昭和62年度日本鉱業会春期大会資料 2303』.
- 植田 1990 = 植田晃一, 「明治前期我国鉱業近代化とお雇い外人の系譜」, 『平成2年度資源・素材関係学協会合同秋期大会分科研究会資料 V 3』.
- 上野 1991 = 上野益三, 『博物学者列伝』, 八坂書房.
- 梅溪 1991 = 梅溪昇 (編), 『明治期外国人叙勲史料集成』, 第4巻, 思文閣出版.
- ヴェスコヴィ 1974 = Gerhard Vescovi (石橋長英・今井正・訳), 『日本医学の開拓者 エ

- ルウィオン・ベルツ』, 日本新薬(株).
- 大久保 1976 = 大久保昭教, 『外国人のみた天理教』, 第2版, 天理教道友社.
- 大島 1980 = 大島清二, 『ジャポニスム——印象派と浮世絵の周辺』, 美術公論社.
- 太田 1996 = 太田健一, 『オスカー・コルジュルトと野崎武吉郎——政府お雇ドイツ人と日本塩業家の交流』, 『倉敷の歴史——倉敷市史紀要』, 6号.
- 大塚 1985 = 大塚孝一, 『吉岡鉱山の近代化とA. メッゲル』, 『昭和60年度全国地下資源関係学協会合同秋期大会分科研究会資料 G 鉱業近代100年を支えた人々』.
- 岡本 1983 = 岡本幸雄・今津健治, 『明治前期官営工場沿革 千住製絨所・新町紡績所・愛知紡績所』, 東洋文化社.
- 音楽大事典 1982 = 『音楽大事典』, 第4巻, 平凡社.
- 音楽辞典 1991 = 『新訂 標準音楽辞典』, 音楽の友社.
- 外交資料 = 外務省外交史料館, 外国人叙職雑件, 独逸国ノ部, 6-2-1-5-6.
- 華族 1996 = 霞会館(編), 『平成新修 旧華族家系大系』, 第1巻, 霞会館.
- 鎌倉 1990 = 鎌倉啓三, 「一つの奇縁——ルイス・フランク先生のこと」, 『緑丘』, 68号.
- 鎌田 1943 = 鎌田久明, 「クルト・ネッターの日本鉱山業振興策」, 『経済史研究』, 29巻3号.
- 上村 1984 = 上村直己, 「明治初期ドイツ留学生安東清人」, 『熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編』, 19号.
- 加茂 1993 = 加茂詮, 「オスカー・コルジュルトと『日本海塩製造論』」, 日本塩業研究会(編), 『日本塩業の研究』, 22集, 日本塩工業会.
- 木村 1979 = 木村毅, 『日本に來た五人の革命家』, 恒文社.
- 京都医史 1980 = 京都府医師会(編), 『京都の医学史』, 思文閣出版.
- キリスト教 1988 = 『日本キリスト教歴史大事典』, 教文館.
- 鉱業会 1943 = 『日本鉱業会会員名簿』, 昭和18年版.
- 幸田 1994 = 幸田亮一, 『ドイツ工作機械工業成立史』, 多賀出版.
- 古賀 1980 = 古賀保夫, 「E. ヤーン教授の滞日回想」, 『中京大学教養論叢』, 21巻1号.
- 小堀 1969 = 小堀桂一郎, 『若き日の森鷗外』, 東京大学出版会.
- 斎藤 1985 = 斎藤要, 「日本における自然科学的商品学の黎明期」, 日本商品学会北海道部会(編), 『北海道部会二十年史』, 所収.
- 佐々木 1985 = 佐々木正勇, 「フライベルク鉱山学校の日本人留学生」, 『研究紀要』(日本大学人文科学研究所), 31号.
- 佐藤 1985 = 佐藤林平, 「キルヘルム・ハイネをめぐる諸問題」, 『慶応義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』, 1号.
- 佐藤 1988(1), (2) = 佐藤林平, 「Heuskenの死をめぐる」, 『慶応義塾大学日吉紀要 英語英文学』, 8号, 10号.
- ザンドフリート 1987 = Kees Zandvliet (鳥井裕美子・訳), 「ザハリアス・ワーヘナール(1614-1668)」, ワーヘナール展 1987, 所収.
- シュピース 1934 = Gustav Spieß (小沢敏夫・訳), 『シュピースのプロシヤ—日本遠征紀』, 奥川書房.

- シュミット 1995 = Gerhard Schmidt (松尾展成・編訳), 『近代ザクセン国制史』, 九州大学出版会.
- ショットレンダー 1971 = Felix Schottländer (石橋長英・訳), 『エルウィン フォン ベルツ. 日本に於ける一ドイツ人医師の生涯と業績』, 日本新薬(株).
- 新見 1969 = 新見吉治, 『分け登る歴史学の山路』, 新見吉治先生頌寿記念刊行会.
- 瀬木 1981 = 瀬木慎一, 『美術商としてのビング』, ビング 1981, 所収.
- 千住 1928 = 『千住製絨所五十年略史』, 千住製絨所.
- 宗田 1889 = 宗田一, 『図説 日本医療文化史』, 思文閣出版.
- 大学職員録(1), (2) = 『全国大学職員録, (1)国公立大学篇, (2)私立大学篇』, 広潤社.
- 高野 1961 = 高野岩三郎, 『かっぱの尻』, 法政大学出版局.
- 高野 1974 = 高野紀子, 『ドイツ人音楽家と日本』, 日独協会(編), 『日独文化交流の史実』, 日独協会, 所収.
- 武内 1995 = 武内博(編), 『増補改訂 来日西洋人名事典』, 日外アソシエーツ.
- 武智 1997 = 武智秀夫, 『ライブチャヒでの衛生学研修』, 『鷗外』, 61号.
- 竹之内 1995 = 竹之内耕・宮島宏, 『フォッサマグナミュージアム』, 『地質ニュース』, 486号.
- 東大・経済 1976 = 『東京大学経済学部五十年史』, 東京大学出版会.
- 富永 1933 = 富永牧太, 『著者小伝』, Hans Haas (富永・訳), 『天理教』, 天理図書館(『天理図書館参考資料 2』), 所収.
- 友田 1978 = 友田清彦, 『わが国の草創期土性調査事業に関する考察——Max Fesca の先行者 Oscar Korschelt を中心に』, 『農村研究』, 47号.
- 朝永 1982 = 朝永振一郎, 『ハイゼンベルク教授のこと』, 『朝永振一郎著作集』, 第2巻, みすず書房.
- 中井 1969 = 中井晶夫, 『解説』, Friedrich Graf zu Eulenburg (中井・訳), 『オイレンブルク日本遠征紀』, (下), 雄松堂, 所収.
- 中井 1983(1) = 中井晶夫, 『1849年ドレスデンの五月蜂起におけるワグナー, バクーニンとW. ハイネ』, 『ドイツ語圏研究』, 1号.
- 中井 1983(2) = 中井晶夫, 『解説』, Wilhelm Heine (中井・訳), 『ハイネ世界周航日本への旅』, 雄松堂出版, 所収.
- 長井 1957 = 長井和雄, 『シュブランガー』, 牧書店(長田新(編), 『西洋教育史』, 第12巻).
- 長崎大 1975 = 瓊林会(編), 『暁星淡く瞬きて 長崎高等商業学校・長崎大学経済学部七十年史』.
- 長沢 1953 = 長沢寸美遠, 『創立50年余の工場に現存する機械の購入された年と製作者』, 『マシナリー』, 1953年4月号.
- 中村 1973 = 中村尠, 『新説明治陸軍史』, 梓書房.
- 日本軍 1971 = 日本近代史料研究会(編), 『日本陸海軍の制度・組織・人事』, 東京大学出版会.
- 日本人名 1979 = 『日本人名大事典』, 第2巻, 平凡社.

- 橋本 1970 = 橋本謙一, 「オスカー・コルシェルトの業績」, 『化学と工業』, 23巻5号.
- 八田 1982 = 八田伸祐, 「異人館主メッツゲル」, 『朝日新聞 秋田版』, 1982/3/1.
『遙かなる波の音 外国人妻達の歲月』——Foreign wives 1996を見よ.
- 平田 1983 = 平田寛, 「ヨーロッパ最初の愛慕家——化学者オスカー・コルシェルト」,
『本』, 8巻2号.
- ビング 1981 = Samuel Bing (編) (大島清二・ほか訳), 『芸術の日本』, 美術公論社.
- フォルカー 1981, 1982 = T. Volker (前田正明・訳), 「磁器とオランダ連合東インド会社」,
(26), (27), (28), 『陶説』, 345号 (1981), 347号 (1982), 348号 (1982).
- 藤原 1994 = 藤原隆男, 「オスカー・コルシェルトの『酒の製造について』」, 『酒史研究』,
12号.
- 藤原 1995 = 藤原隆男, 「オスカー・コルシェルトと開拓使」, 『岩手大学文化論集』, 3号.
- フランク先生 1986 = 「ルイス・フーゴ・フランク先生略歴」, 『山梨工業会会報』, 63号.
- ヘルテル先生 1950 = 大阪大学医学部第一外科教室 (編), 『ヘルテル先生追想録』.
- 星野 1985 = 星野慎一, 「ヤーン先生と俳句」, 『文芸春秋』, 63巻12号.
- ミヒェル 1990(2) = Wolfgang Michel, 「出島蘭館医カスパル・シャムベルゲルの生涯について」,
『日本医史学雑誌』, 36巻3号.
- ミヒェル 1991 = Wolfgang Michel, 「カスパル・シャムベルゲルの『甲辞』について」, 『日本
医史学雑誌』, 37巻4号.
- ミヒェル 1995(2) = Wolfgang Michel, 「日本におけるカスパル・シャムベルゲルの活動に
ついて」, 『日本医史学雑誌』, 41巻1号.
- ミヒェル 1995(3) = Wolfgang Michel, 「17世紀の平戸・出島蘭館の医薬関係者について」,
『日本医史学雑誌』, 41巻3号.
- ミヒェル 1996(1) = Wolfgang Michel, 「カスパル・シャムベルゲルとカスパル流外科(1)」,
『日本医史学雑誌』, 42巻3号.
- ミヒェル 1996(2) = Wolfgang Michel, 「出島蘭館医ハンス・ユリアーン・ハンコについ
て」, 『言語文化論究』, 7号.
- 宮島 1984 = 宮島久雄, 「サミュエル・ビングと日本」, 『国立国際美術館紀要』, 1号.
- 宮永 1986 = 宮永孝, 『開国の使者 ハリスとヒュースケン』, 雄松堂出版.
- 宮永 1993 = 宮永孝, 『日独文化人物交流史』, 三修社.
- 文部省 = 『文部省職員録』, 文教協会.
- 安井 1995 = 安井広, 『ベルツの生涯 近代医学導入の父』, 思文閣出版.
- 山崎 1989 = 山崎国紀, 「ナウマン論争の性格」, 同著, 『森鷗外——基層的論究』, 八木書
店, 所収.
- 山下 1991(1) = 山下昇, 「ナウマン博士のゆかりの人と所をたずねて」, (1), 『地質ニュー
ス』, 446号.
- 山下 1992(2), (3), (4) = 山下昇, 「ナウマン博士のゆかりの人と所をたずねて」, (2), (3),
(4), 『地質ニュース』, 451号, 454号, 455号.
- 山下 1993(1) = 山下昇・アンドレアス キュッパース (Andreas N. Küppers), 「E. ナウマ
ンの博士号取得について」, 『地質学雑誌』, 99巻3号.

- 山下 1993(2), (3) = 山下昇, 「ナウマンの地質構造研究——(2)日本地質像の総合, (3)日本地質像の補整と擁護」, 『地質学雑誌』, 99巻1号, 99巻11号。
- 山下 1995 = 山下昇 (編), 『フォッサマグナ』, 東海大学出版会。
- 山脇 1988 = 山脇悌二郎, 「唐・蘭船の伊万里焼輸出」, 『有田町史 商業編』, 第1巻, 有田町, 所収。
- ユーバーシャール教授 1968 = 「故ユーバーシャール教授略歴・著作目録」, 『甲南大学文学会論集』, 37号 (故ユーバーシャール教授追悼特集号)。
- ユンケル氏 1927 = 「ユンケル氏逝く」, 『英語青年』, 57巻10号。
- 横田 1956(1), (2), 1957(3) = 横田禎, 「京都府療病院教師 Heinrich Botho Scheube」, (1), (2), (3), 『京都医学会雑誌』, 7巻1号, 3号, 8巻3号。
- 吉城 1981 = 吉城文雄, 「秋田県阿仁鉱山の近代化構想について」, 半田市太郎先生退官記念会 (編), 『秋田地方史論集』, みしま書房, 所収。
- 吉田 1968 = 吉田光邦, 『お雇い外国人 2 産業』, 鹿島出版会。
- ヨルグ 1987 = C. J. A. Joerg (井垣春雄・訳), 「17世紀前半期のオランダ東インド会社の磁器取引」, ワーヘナール展 1987, 所収。
- 陸軍雇独逸人 = 陸軍省 (編), 「雇独逸人名調査表. 付, 個人略歴 (明治43年調査)」, in: John Young, *Checklist of Microfilm Reproductions of Selected Archives of the Japanese Army, Navy and Other Government Agencies 1868-1945*, Washington 1959.
- レンホルム氏 1928 = 「赤貧に苦しむレ氏に養老年金を送る 本邦の友人門弟から」, 『帝國大学新聞』, 1928/7/9, 「友情と師恩に酬ひて 在米のレンホルム氏から」, 同紙, 1928/12/10.
- 六高 1980 = 藤井駿 (編), 『六高同窓会会員名簿』, 岡山六高同窓会本部。
- ワーヘナール展 1987 = 長崎オランダ村博物館 (編), 『オランダ村博物館第3回展——オランダ東インド会社出島商館長ワーヘナール——目録』。

(4) Namenverzeichnis von 50 “Sachsen” in Japan, 1649—1998

Das alphabetische Namenverzeichnis der in Japan tätigen und in diesem Aufsatz aufgezeigten 50 Deutschen, die entweder in Sachsen geboren wurden oder vor der Abfahrt nach Japan bzw. nach der Heimkehr aus Japan in Sachsen wirkten bzw. wirken, einschließlich der in Japan gestorbenen Sachsen und der jetzt in Japan tätigen Sachsen, von 1649 bis 1998, mit laufender Nummer:

Arnold, Wido (1)	Behrend, Martin (39)
Bälz, Erwin (von) (37)	Berliner, Siegfried [Sigfrid] (38)

- Beyer, Johannes Albert (25)
 Exnell, Ottomar (3)
 Fellmer, Helmut (32)
 Fracke, Johan Georg (34)
 Frank, Louis (35)
 Gößner, Gesine (5)
 Haas, Hans (28)
 Härtel, Fritz [Friedrich] (36)
 Hammitzsch, Horst (29)
 Hartig, Georg (30)
 Heine, Wilhelm (27)
 Heisenberg, Werner (26)
 Hilgendorf, Franz (31)
 Hubricht, Manfred (33)
 Jahn, Erwin (45)
 Junker, Emil (47)
 Korschelt, Oscar (7)
 Kou, Hedy, geb. Wekel (6)
 Lönholm [Schmidt-Lönholm], Ludwig
 Hermann (49)
 Martin, C. F. (41)
 Meister, Georg [George] (40)
 Mezger, Adolf (43)
 Mosle [Moslé], Alexander Georg (44)
- Müller, Max (42)
 Nachod, Oskar (23)
 Naumann, Edmund (22)
 Netto, Curt (24)
 Overkamp, Christian Hendrik (4)
 Rex, Arthur Graf von (48)
 Schamberger, Capsar (9)
 Schanz, Moritz (11)
 Scharschmidt, Clemens (10)
 Scheube, Botho (17)
 Schmiedel, Otto (15)
 Scholz, Paul (18)
 Schurig, Arndt Hermann (16)
 Simon, Edmund (8)
 Sondermann, Peter (20)
 Spieß, Gustav (13)
 Spranger, Eduard (14)
 Stecher, Georg Walter (12)
 Sußmann, August (19)
 Tenzler (?) (21)
 Überschaar, Johannes [Hans] (46)
 Wäntig, Heinrich (2)
 Wagner, Zacharias (50)